太宰府市の文化財第83集

大宰府条坊跡 29

—第234次調査—

平 成 17 年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第83集

大宰府条坊跡 29

—第234次調査—

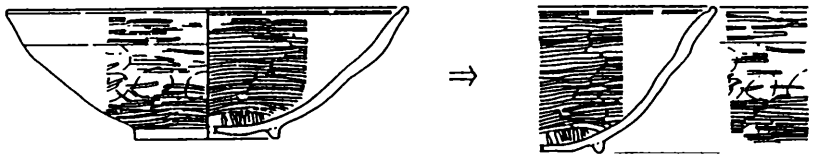
平成17年

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡29　－第234次調査－　正誤表

頁・行	誤	正
P14 l 23	皿（17）Ⅳ－１類	皿（17）Ⅵ－１類
P15第10図　タイトル	234SE002明灰色粘質土	234SK002明灰色粘質土
P15第10図　タイトル	234SE002灰色土	234SK002灰色土
P16第11図　タイトル	234SE002灰色土	234SK002灰色土
P16第11図　タイトル	234SE002暗青灰色土	234SK002暗青灰色土
P8 l 7・9・16 P31 l 8・11 P33 l 5	SX003	SD003
P６第４図タイトル P21第12図～P30 第21図までのタイトル	234SX003	234SD003
P11 l 2 P16 l 13 P18 l 21 P20 l 18	234SX003	234SD003
P17 l 26	鉢（40～45）	鉢（40～44）
P18 l 6・7	Ｖ－１ｃ類あるいはＶ－４ｂ類かＶ－４ｃ類	Ｖ類
P18 l 9	Ⅳ－１ａ類、94・95はⅣ－１ｂ類	Ⅵ－１ａ類、94・95はⅥ－１ｂ類
P29 l 6	121はⅡ－２ａ類	121は坏Ⅰ類
P29 l 8	坏（122）Ⅰ類	椀（122）椀Ⅱ－２ａ
CDタイトル	太宰府条坊234次	大宰府条坊234次

P13　第13図　234SD003黒色砂質土　38を以下のように差し替えてください。



序

本書は、共同住宅建築に伴い、平成16年度に発掘調査を行いました大宰府条坊跡第234次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁跡の南側に広がる広大な都市遺跡です。今回はその東側で、古代寺院である観世音寺と般若寺とのほぼ中間に位置する地点を調査しました。ここでは平安時代中・後期を中心とした時期の河川跡とその後掘削された井戸等を検出しました。大宰府条坊最盛期の当時、付近が河川あるいは湿地だったことは新知見で、当時の景観復元において貴重な資料を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

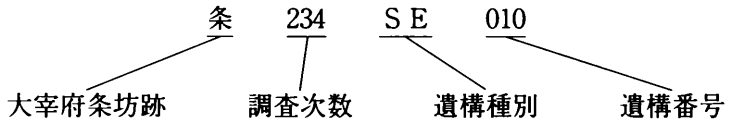
平成17年５月

太宰府市教育委員会

教育長　關　敏治

例　言

1．本書は、大宰府条坊跡第234次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査地点は太宰府市朱雀４丁目2628－２に所在し、調査を平成15年６月４日から平成15年８月５日にかけて実施した。対象面積は300㎡である。
3．発掘調査および報告書作成は、太宰府市教育委員会の指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所（所長 戸田哲也）が行った。
4．遺構の実測図作成および写真撮影は小山裕之が行い、調査地の空中写真は有限会社空中写真企画が行った。
5．遺構実測の基準点は国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって、報告書に示す方位はすべて座標北（G.N）を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から６° 30′ 西偏する。
6．本書に掲載した遺構番号は以下の要領で理解される。なお、本書中では遺構略称の「条」を基本的に省略している。



7．報告書作成業務は、株式会社玉川文化財研究所において行った。
8．遺物の実測図作成は、土器類を木村百合子、石器類を唐原賢一が行い、遺物の写真撮影は赤間和重が行った。
9．本書の執筆・編集および付属のＣＤ－ＲＯＭデータの編集は、戸田哲也・河合英夫の指導のもとに、小山裕之が行った。
10．本書に用いた分類は以下の文献による。
　陶磁器－『大宰府条坊跡XV』（太宰府市の文化財 第49集）2000
　土　器－『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財 第７集）1983
　瓦　－『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦形式一覧』九州歴史資料館 2000
　石　鍋－「滑石製容器－特に石鍋を中心として」『大宰府陶磁器研究 －森田勉氏遺稿集・追悼論文集』1995
11．本書掲載の大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年表は『大宰府条坊跡XV』第１表を基に加筆したものである。
12．遺構・遺物のカラー写真を、付属のＣＤ－ＲＯＭにＰＤＦデータで収容している。
13．出土遺物および図面、写真等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管し、公開・活用していく予定である。

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

▲出現 ▮増加 ▽減少　　2005.5補訂

紀年銘	AD	大宰府土器形式	磁器区分	国産陶器型式（型式の上限） 灰釉（猿投）	灰釉（美濃）	緑釉	標識磁器	準標識磁器
⑥	800	V	(A古)	折戸O-10		長門？・畿内	白磁Ⅰ類 越州窯系青磁Ⅰ，Ⅱ類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎
	825	VI A		井ヶ谷ⅠG-78		長門・洛北・洛西・黒笹K-14？		
	850	VI B		黒笹K-14 ・ 黒笹K-90		洛西 黒笹K-90？		青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器
	900	VII	A		光ヶ丘1号			
①	925	VIII	(A新)	折戸O-53	大原2号			
	950	IX			虎渓山1号	近江		
	1000	X	B	東山H-72	丸石2号 明和27号		越州窯系青磁Ⅲ類 白磁XI類	
	1050	XI		百代寺				
②	1100	XII A	C	東山HG-105			白磁椀Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ1～3，Ⅵ，XII，XIII類 皿Ⅱ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁0類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類 青白磁
		XII B						白磁鉢Ⅲ類，椀XIV類
		XIII						
	1150	XIV	D				龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1～4，6 皿Ⅰ類 同安窯系青磁椀Ⅱ-a-b類	白磁椀Ⅷ，Ⅴ-4，皿Ⅲ類増加
	1200	XV						白磁椀Ⅷ，皿Ⅷ-1類
		XVI	E				龍泉窯系青磁椀Ⅱ-a-b類	白磁皿Ⅷ-2類
③	1230	XVII					龍泉窯系青磁Ⅲ類 白磁IX類	
	1250	XVIII						龍泉窯系青磁椀Ⅱ-c類 白磁X類 黒釉陶器
④	1300	XIX	F					
⑤	1330	XX	G				龍泉窯系青磁IV類	
	1350							白磁B，C類 安南鉄絵
⑦	1450							
⑧	1500							

紀年銘資料

① AD.927　延長5年，大宰府74次SD205A溝
② AD.1091　寛治5年，平安京左京4条1坊SE8井戸
③ AD.1224　貞応3年，大宰府33次SD605溝
④ AD.1304　嘉元2年，大宰府109.111次SD3200溝
⑤ AD.1330　元徳2年，大宰府45次SX1200池
⑥ AD.784　延暦3年，長岡京102次SD10201溝
⑦ AD.1459・1465　長禄3・寛正5年，福岡市相田CII・SG16池
⑧ AD.1501　文亀元年，大宰府70次SD1805溝
⑨ AD.1265　文永2年，博多62次713土壙

文献

① 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
② 田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告書左京四条一坊」1975 平安京調査会
③ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥ 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦ 福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
⑧ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨ 福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

目　次

Ⅰ．位置と環境 …… 1

Ⅱ．調査組織 …… 1

Ⅲ．調査経過 …… 2

Ⅳ．調査の概要 …… 8
　1．層　位 …… 8
　2．遺　構 …… 8
　　1）井　戸 …… 8
　　2）土　坑 …… 8
　　3）流　路 …… 11
　3．遺　物 …… 11
　　1）井戸出土遺物 …… 11
　　2）土坑出土遺物 …… 12
　　3）流路出土遺物 …… 16

Ⅴ．小　結 …… 31

遺構番号台帳 …… 33
土師器計測表 …… 33
出土遺物一覧表 …… 36

報告書抄録 …… 巻末

Ⅰ．位 置 と 環 境

大宰府条坊跡は福岡県太宰府市に位置しており、推定される範囲は隣接する筑紫野市にまで展開する古代の都市遺跡である。当地は福岡平野の南深部、西から背振山地、東からは三郡山地が会合する低位段丘にあたり、福岡平野と筑紫平野を結ぶ地峡地帯となっている。山地より源を発する各河川は筑紫野市二日市付近を分水嶺として両平野を潤しており、高所より見下ろすと回廊といえる地形的景観を見せる。今回報告する大宰府条坊跡第234次調査は狭隘な谷の中、福岡平野へと流下する御笠川と鷺田川に挟まれた氾濫低地に立地している。現地表面での標高は約33mを測る。

大宰府条坊跡の存在は1968年、鏡山猛による条坊復元案の発表によって世に知られるところとなり、発掘調査による条坊跡の確認作業は昭和43（1968）年の大宰府史跡の発掘調査以来、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会によって実施され、数々の成果と問題点が提起されてきた。調査は今回で234次を数える。

Ⅱ．調 査 組 織

調査・整理を実施した平成16年度および平成17年度の調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会調査組織

（平成16年度／2004年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月30日）
		齋藤実貴男（7月1日～）
		大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正（調査・委託監理担当）
		高橋学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳智子
		渡邊仁
		長直信
		松浦智（7月1日～）

（平成17年度／2005年度）

総括	教育長	關　敏治

庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	齋藤実貴男
		大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正（調査・委託監理担当）
	主任技師	高橋学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		柳智子
		長直信
		松浦智

㈱玉川文化財研究所調査組織

所長	戸田哲也	日本考古学協会会員
調査研究部長	河合英夫	日本考古学協会会員
主任研究員	小山裕之	日本考古学協会会員

Ⅲ．調　査　経　過

今回の調査はマンション建設に伴う埋蔵文化財の事前調査であり、大宰府条坊跡第234次調査として実施した。調査対象地は太宰府市朱雀４丁目2628－２に所在し、調査対象面積は300㎡である。近隣は、西は筑陽学園のグラウンドに隣接し、北約200ｍには国道３号が東西に走っている。

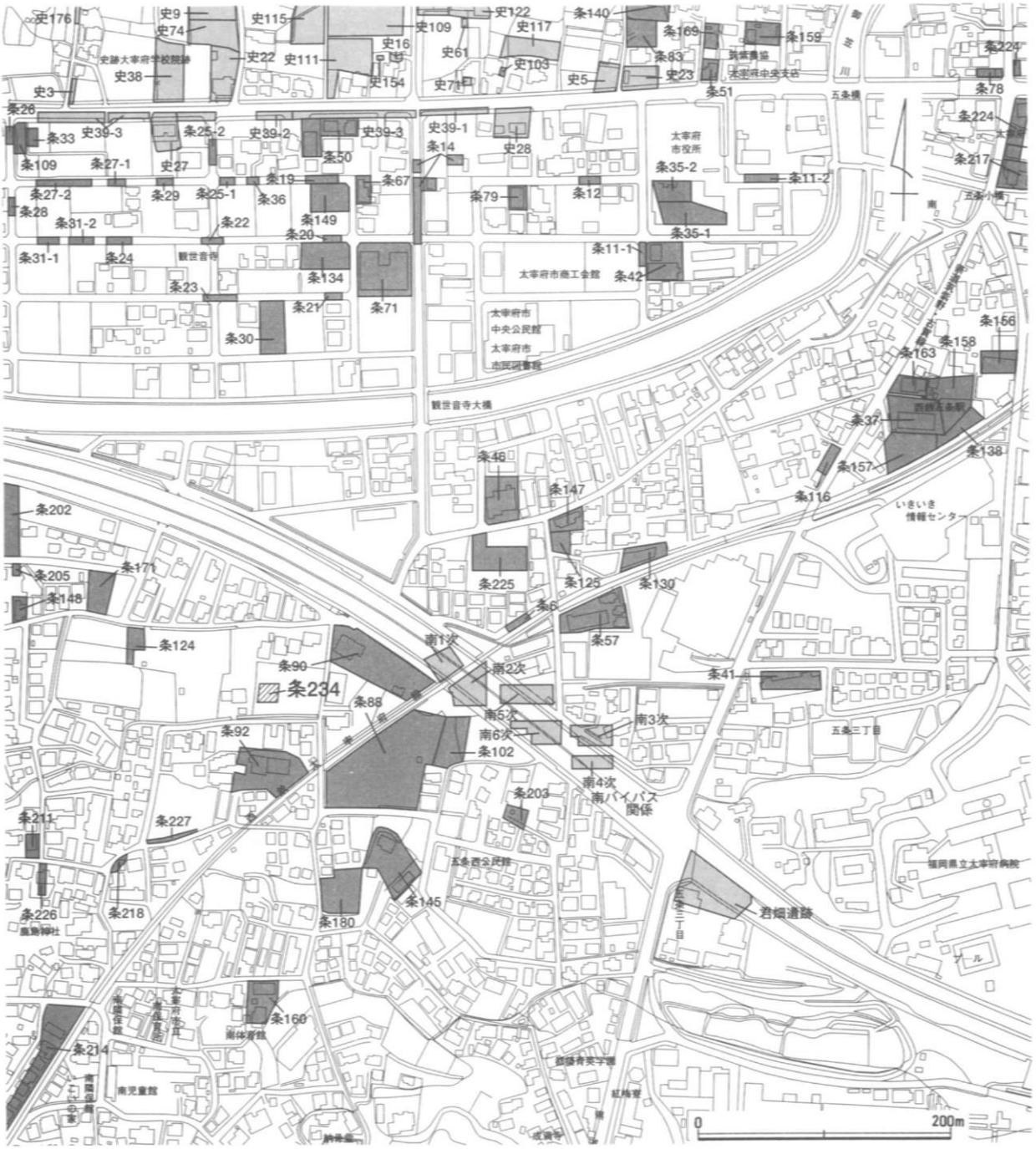
平成10（1998）年９月28日、地権者より、ここに共同住宅を建築するにあたり、埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせが文化財課にあった。ここは大宰府条坊跡の左郭のおよそ中心部北寄りに位置しており、北約200ｍには御笠川が西流している。府の大寺として知られる観世音寺は北約670ｍに位置し、南に約550ｍの位置には古代寺院般若寺跡がある。近隣の発掘調査地点も多く、大宰府条坊に関する遺構が包蔵されている可能性は高いと予想されていた。そこで文化財課は、平成10年11月５日に確認調査を実施した。その結果、現地表（水田耕作面）下の約0.7～１ｍに平安時代後期頃の遺物を含む遺構面および遺物包含層が検出されたため、地権者に遺跡が埋蔵されていることを伝えた。

その後、平成16（2004）年２月９日に、地権者より改めてＲＣ造共同住宅建築を行うことで問い合わせがあった。この建築は遺跡を破壊する工事になるため、建物建築範囲については事前調査を行う必要があるとして、協議を行い、調査費用を原因者負担として発掘調査を実施することになった。なお、工事は急を要し、文化財課直営での発掘調査計画・実施状況では期間内には収まらないため、民間調査組織に委託することになり、指名入札の結果、㈱玉川文化財研究所と調査整理報告委託契約を行った。

調査は平成16（2004）年６月４日に開始し、８月５日に終了した。調査終了後は整理報告作業を行った。

1．大野城跡
2．岩屋城跡
3．陣ノ尾遺跡
4．筑前国分寺跡
5．辻遺跡
6．国分松本遺跡
7．筑前国分尼寺跡
8．国分千足町遺跡
9．御笠団印出土地
10．水城跡
11．大宰府政庁跡
12．観世音寺
13．遠賀団印出土地
14．大宰府条坊跡（破線内）
15．君畑遺跡
16．般若寺跡
17．市ノ上遺跡
18．神ノ前窯跡
19．原口遺跡
20．篠振遺跡
21．前田遺跡
22．宮ノ本遺跡
23．雛川遺跡
24．フケ遺跡
25．尾崎遺跡
26．脇道遺跡
27．殿城戸遺跡
28．剣塚遺跡
29．唐人塚遺跡
30．峯遺跡
31．橘田山遺跡
32．太宰府天満宮（安楽寺跡）
33．浦城跡
34．原遺跡
35．大宰府条坊跡第225次調査
36．大宰府条坊跡第234次調査

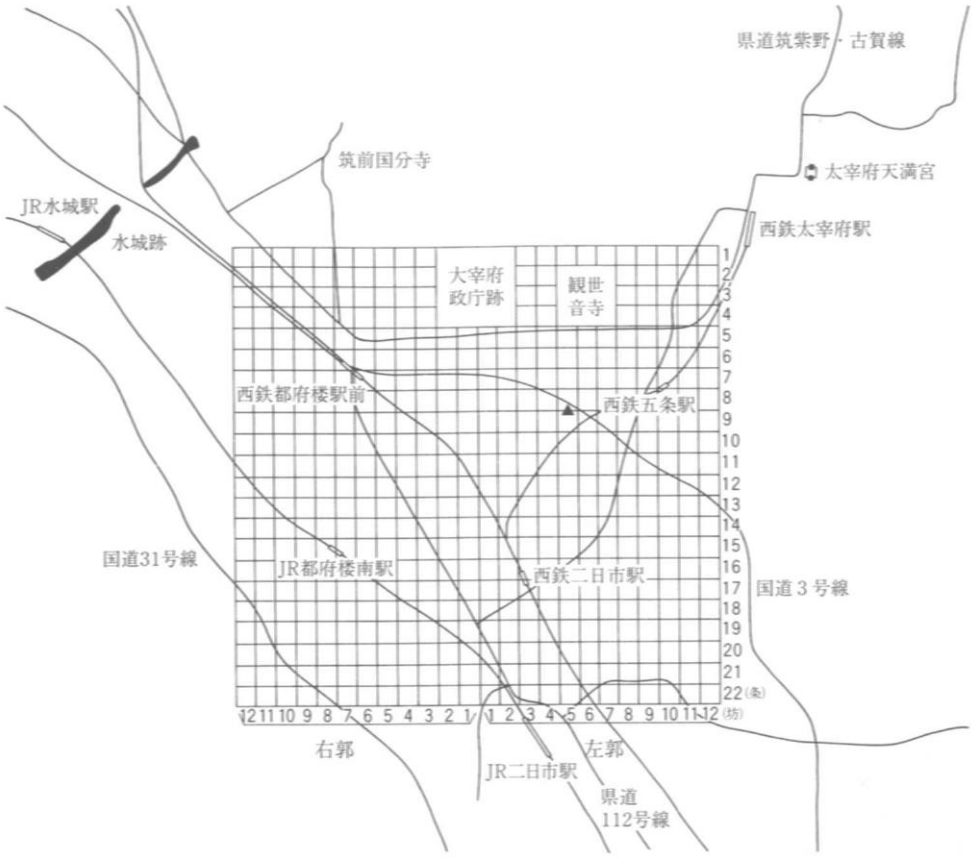
第1図　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）



第２図　報告調査地と周辺遺跡（1/5,000）

名　称	次数	掲　載　文　献
大宰府条坊跡	6	太宰府市教育委員会1981「筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡－他、歴史時代遺跡調査概要２編－
大宰府条坊跡	11－1	太宰府市教育委員会1983「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	11－2	太宰府市教育委員会1983「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	12	太宰府市教育委員会1983「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	14	太宰府市教育委員会1983「大宰府条坊跡Ⅱ」
大宰府条坊跡	19	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	20	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	21	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	22	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	23	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	24	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」

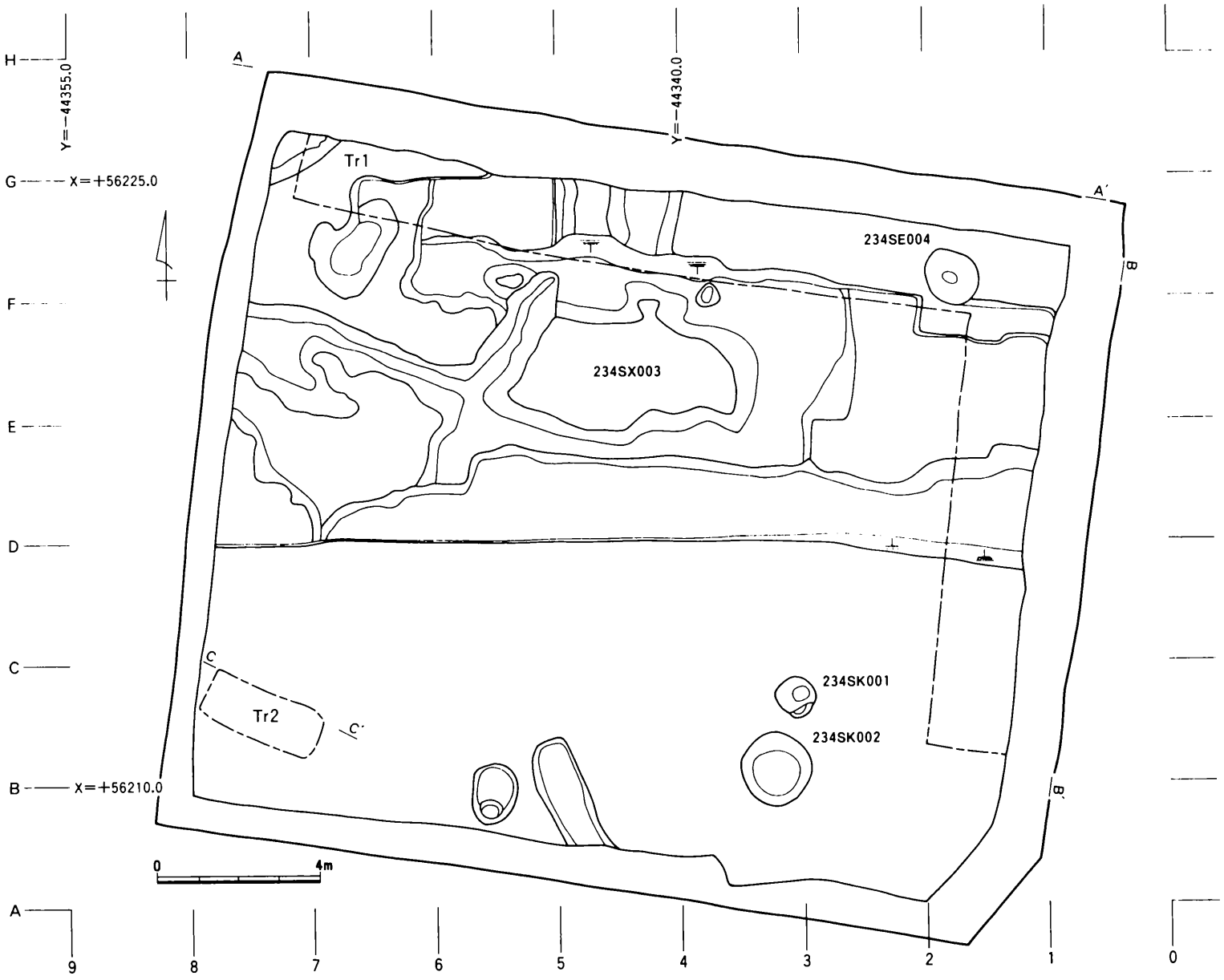
名　称	次数	掲　載　文　献
大宰府条坊跡	25－1	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	25－2	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	26	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	27－1	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	27－2	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	28	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	29	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	30	太宰府市教育委員会1984「大宰府条坊跡Ⅲ」
大宰府条坊跡	33	未報告
大宰府条坊跡	35－1	未報告
大宰府条坊跡	35－2	未報告
大宰府条坊跡	36	未報告



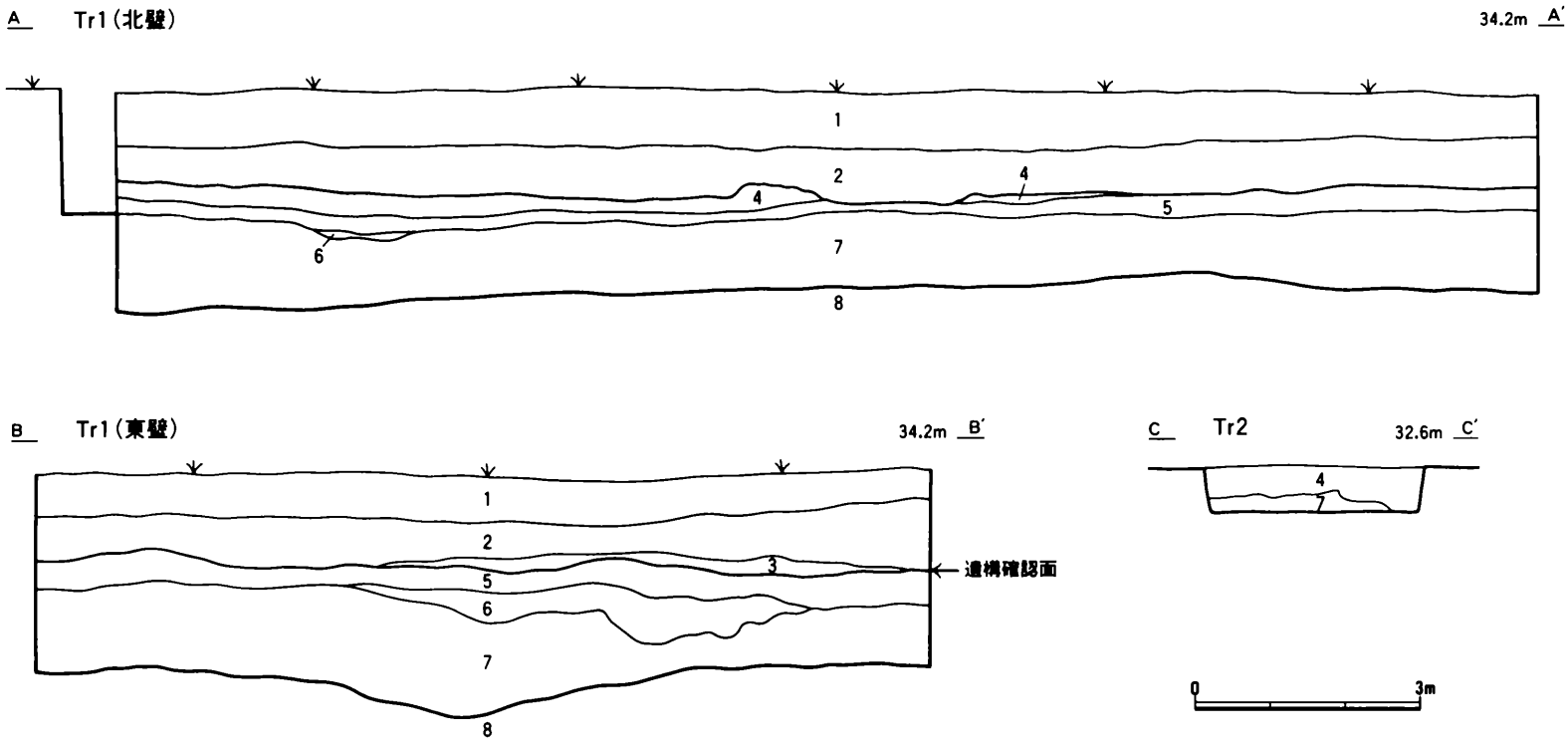
第３図　調査地点概念図（1/40,000　▲調査地）

名　称	次数	掲　載　文　献
大宰府条坊跡	41	未報告
大宰府条坊跡	42	未報告
大宰府条坊跡	46	未報告
大宰府条坊跡	50	太宰府市教育委員会1999「大宰府条坊跡XI－第50次調査－」
大宰府条坊跡	57	未報告
大宰府条坊跡	67	未報告
大宰府条坊跡	71	未報告
大宰府条坊跡	79	未報告
大宰府条坊跡	83	未報告
大宰府条坊跡	88	未報告
大宰府条坊跡	90	未報告
大宰府条坊跡	92	未報告
大宰府条坊跡	102	未報告
大宰府条坊跡	109	未報告
大宰府条坊跡	116	未報告
大宰府条坊跡	124	太宰府市教育委員会2004「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	125	未報告
大宰府条坊跡	130	未報告
大宰府条坊跡	134	未報告
大宰府条坊跡	140	未報告
大宰府条坊跡	145	未報告
大宰府条坊跡	147	未報告
大宰府条坊跡	149	太宰府市教育委員会1999「大宰府条坊跡XII－大宰府条坊跡第149次調査－」
大宰府条坊跡	157	太宰府市教育委員会2002「大宰府条坊跡21－第156・157・158次調査－」
大宰府条坊跡	158	太宰府市教育委員会2002「大宰府条坊跡21－第156・157・158次調査－」
大宰府条坊跡	159	未報告
大宰府条坊跡	160	太宰府市教育委員会2004「大宰府条坊跡23」
大宰府条坊跡	163	未報告
大宰府条坊跡	169	未報告
大宰府条坊跡	171	太宰府市教育委員会2004「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	180	未報告
大宰府条坊跡	189	未報告
大宰府条坊跡	203	未報告

名　称	次数	掲　載　文　献
大宰府条坊跡	218	未報告
大宰府条坊跡	225	太宰府市教育委員会2004「大宰府条坊跡26」
大宰府条坊跡	226	未報告
大宰府条坊跡	227	未報告
大宰府条坊跡	234	本書掲載
大宰府史跡	9	九州歴史資料館1971「大宰府史跡－昭和46年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	22	九州歴史資料館1973「大宰府史跡－昭和47年度発掘調査概報－」
大宰府史跡	27	九州歴史資料館1975「大宰府史跡－昭和49年度発掘調査概報－」
大宰府史跡	28	九州歴史資料館1974「大宰府史跡－昭和48年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	38	九州歴史資料館1977「大宰府史跡－昭和51年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	39－1	九州歴史資料館1976「大宰府史跡－昭和50年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	39－2	九州歴史資料館1977「大宰府史跡－昭和51年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	39－3	九州歴史資料館1976「大宰府史跡－昭和51年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	61	九州歴史資料館1979「大宰府史跡－昭和53年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	74	九州歴史資料館1982「大宰府史跡－昭和56年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	103	九州歴史資料館1987「大宰府史跡－昭和61年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	109	九州歴史資料館1989「大宰府史跡－昭和63年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	111	九州歴史資料館1989「大宰府史跡－昭和63年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	115	九州歴史資料館1990「大宰府史跡－平成元年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	117	九州歴史資料館1990「大宰府史跡－平成元年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	122	九州歴史資料館1993「大宰府史跡－平成４年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	154	九州歴史資料館1995「大宰府史跡－平成６年度発掘調査略報－」
大宰府史跡	176	九州歴史資料館1998「大宰府史跡－平成９年度発掘調査略報－」
福岡南バイパス遺跡	1	福岡県教育委員会1978『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集
福岡南バイパス遺跡	2	福岡県教育委員会1978『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集
福岡南バイパス遺跡	3	福岡県教育委員会1976『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第３集
福岡南バイパス遺跡	4	福岡県教育委員会1976『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第３集
福岡南バイパス遺跡	5	福岡県教育委員会1975『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第２集
福岡南バイパス遺跡	6	福岡県教育委員会1977『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第６集
君畑遺跡		福岡県教育委員会1977『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集



第4図　大宰府条坊跡第234次調査遺構配置図（1/150）



1．褐灰黄色土（現代客土層）
2．暗褐灰色土（旧耕作土）
3．明灰色粘質砂
4．黒色砂質土（SX003）
5．黒灰色砂質土（SX003）
6．黒褐色砂質土（SX003）
7．黄褐灰砂礫層
8．青灰色粘質土

第5図　1・2トレンチ土層断面図（1/100）

Ⅳ．調査の概要

1．層　位（第５図，図版４）

本遺跡の上層は現代の盛土である。１層は褐灰黄色土を呈し、層厚は調査区南側で約40cm、北側で70cmを測る。１層以下には旧耕作土層（２層）が堆積していた。暗褐灰色を呈し、さらに数層に細別可能であったが、近現代耕作土層として一括した。層厚は50～95cm堆積しており、本層を除去した後に遺構面を確認した。遺構面は南側から北側に向かう緩斜面を呈し、標高は南壁部で32.4m、北端部で32.1mを測り、御笠川や旧流路（SX003）の氾濫に起因する、粗い灰色砂、明灰色粘質砂、灰色粘質土、暗灰色粘質土、白色シルトまじり灰色砂質土、白色砂まじり黒灰色砂質土、黒色砂質土が観察される。

旧流路（SX003）により占められている調査区北側地区では、遺物包含層調査の後、北壁･東壁（Tr１）およびＢ７・８区（Tr2）でトレンチ調査を実施した。その結果、北側に向かい緩やかな傾斜が認められ、旧流路の範囲は調査区北側を越えて広がることが明らかとなり、流芯もさらに北側に存在することが想定される。

2．遺　構

1）井　戸

234SE004（第６図，図版２）

本址は調査区北東部、発掘区ではＦ２区に位置する。SX003（旧流路）と重複し、本址が新しい。平面形は不整円形を呈し、規模は径118cm～120cm、深度87cm、底面標高30.4mを測る。多量の円礫・角礫により人為的に埋め戻されており、井戸下部には角材による一段の井戸枠と水溜として曲げ物が設置されていた。

覆土は遺構上層（黒色粘質土）、中層（褐灰白色砂質土）、井戸枠内（褐灰白色砂礫層）、裏込め（灰白色粘質土）に分層され、各土層から遺物が出土している。

本址の時期は、出土遺物の様相から磁器区分Ｃ期（大宰府編年Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）頃の埋没と考えられる。

2）土　坑

234SK001（第７図，図版３）

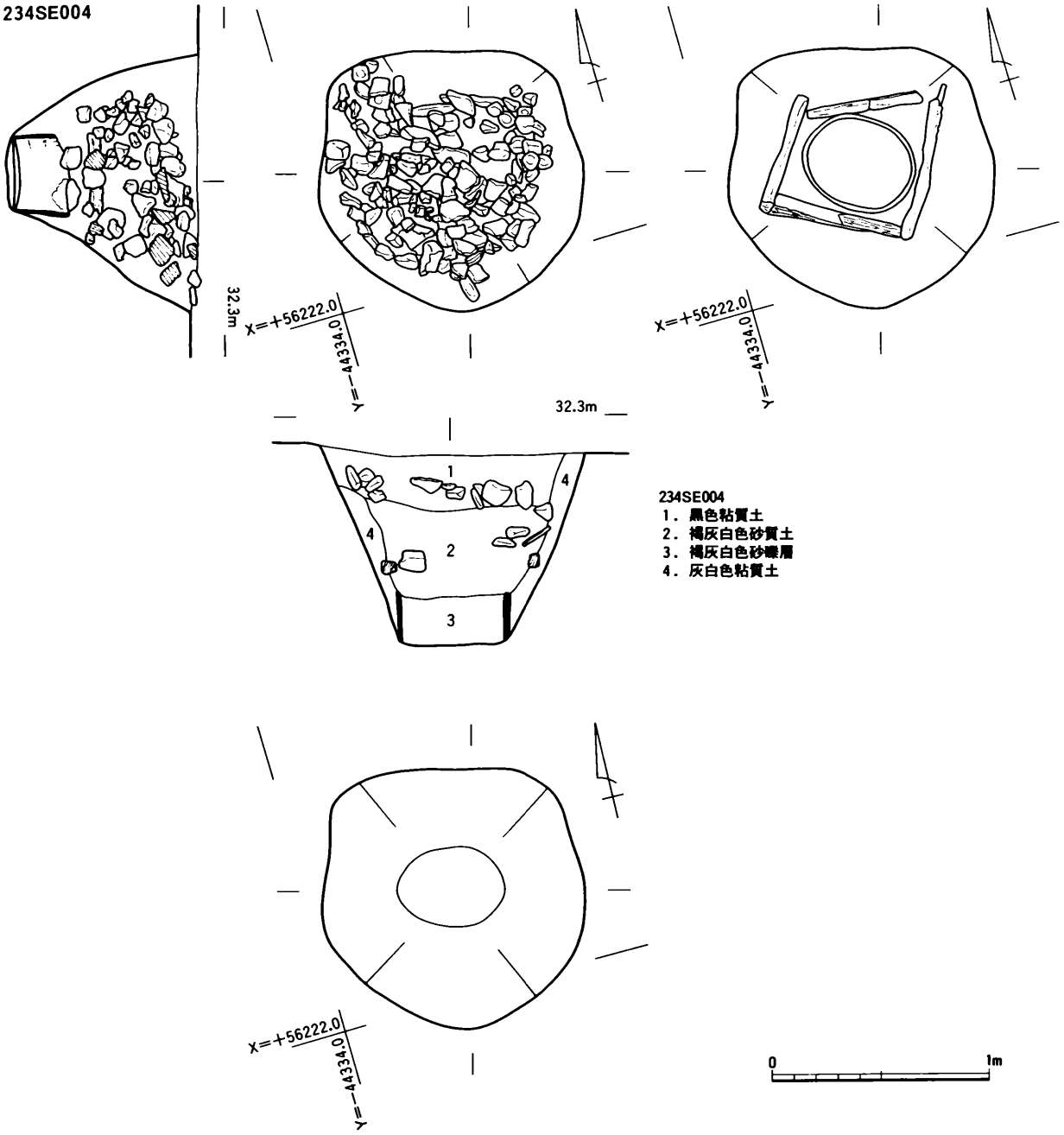
本址は調査区南東側、発掘区ではＢ２・３区に位置する。平面形が不整円形を呈し、南東側に段差を設けている。規模は径92～103cm、検出面からの深度は51cmを測る。

遺構内覆土は６層に分層され、そのうち第５層は植物遺存体主体層であった。遺物は各土層から出土しており、それら出土遺物の様相から磁器区分Ｃ期（大宰府編年Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）の埋没と推定される。

234SK002（第７図，図版３）

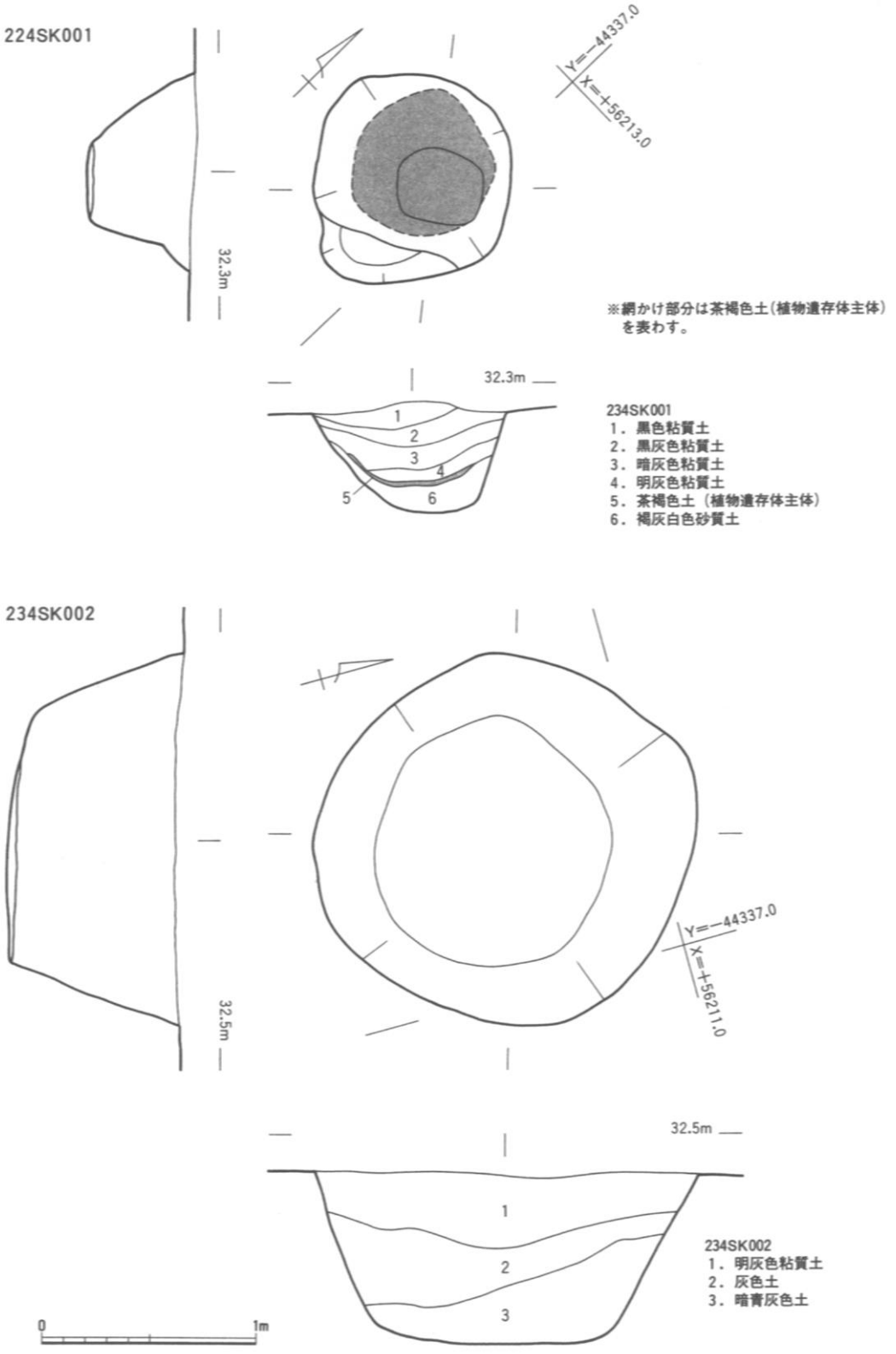
本址は調査区南東側、発掘区ではＡ・Ｂ２・３区に位置する。平面形は略円形を呈し、規模は径170～185cm、検出面からの深度は78cmを測る。調査時には絶えず底面から湧水しており、ここでは土坑に分類したが、井戸として使用されていた可能性も考えられる。

遺構内覆土は３層に分層され、各土層からは遺物が出土している。磁器区分Ｃ期の遺物を主体とするものの、磁器区分Ｄ期の遺物である龍泉窯糸青磁Ⅰ類が灰色土より若干量出土しており、他の遺構より



第6図　234SE004実測図（1/30）

は埋没年代が僅かに新しいものと推定される。磁器区分D期（大宰府編年XV～XV期、12世紀中葉～13世紀初頭）の埋没と考えられる。



第７図　234SK001・002実測図（1/30）

3）流　路

234SX003（第４・５図，図版４）

本址は調査区南側から北側にかけて、発掘区ではＤ～Ｇ１～７区に位置する。SE004と重複し、本址が古い。調査は旧流路に堆積した遺物包含層を主な目的とし、包含層調査の後に流路の状況を把握するため、北壁･東壁（Ｔｒ１）にてトレンチ調査を行った。その結果、確認面から約１ｍの深度に流路底面礫層が存在し、底面標高値（西部約31.7m、東部約32.1m）から判断すると流路方向は東から西に流下するものと推定された。また､本調査区が御笠川から距離が近い氾濫低地に位置することを勘案すると、本址は御笠川の氾濫時に出現した流路であるものと考えられる。

埋没土は３層に分層され、各土層からは多量の遺物が出土している。出土遺物の様相は磁器区分Ａ期（大宰府編年Ⅴ～Ⅸ期、８世紀末～10世紀中頃）の遺物も若干出土しているが、磁器区分Ｃ期（大宰府編年Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）を主体としており、当該期の中で埋没したものと推定される。

3．遺　物

1）井戸出土遺物

234SE004黒色粘質土（第８図）

土師器

小皿ａ（１・２）　口径9.0･9.2cm、器高1.3cm、底径7.0cmを計測する。底部切り離しは１・２共にヘラ切りである。

丸底坏ａ（３・４）　口径15.0cm、残存器高2.8･3.2cmを計測する。底部切り離しは３・４共にヘラ切りで、底部外面には板状圧痕が、内面にはミガキｂが観察される。

丸底坏ｃ×椀ｃ（５）　底径7.3cmを計測する、丸底坏ｃまたは椀ｃの底部破片である。

丸底坏ｃ（６）　底径7.3cmを計測する。

越州窯系青磁

椀（７）　底部から体部下半の破片で、Ⅰ－２ウ類に分類される。磁器区分Ａ期（大宰府編年Ⅴ～Ⅸ期、８世紀末～10世紀中頃）の製品。

234SE004褐灰白色砂質土（第８図）

土師器

小皿ａ（１～８）　口径8.9～9.6cm、器高1.2～1.5cm、底径7.0～7.3cmを計測する。底部切り離しは全てヘラ切りである。

丸底坏ａ（９～11）　口径14.4～16.4cm、残存高・器高2.8～3.0cmを計測する。底部切り離しは全てヘラ切りである。

白磁

椀（12～14）　口縁部から体部上半の破片で、12がⅣ類、13がⅤ－１類かⅧ－２類に分類される。14は口唇部に僅かに輪花が観察される未分類資料である。

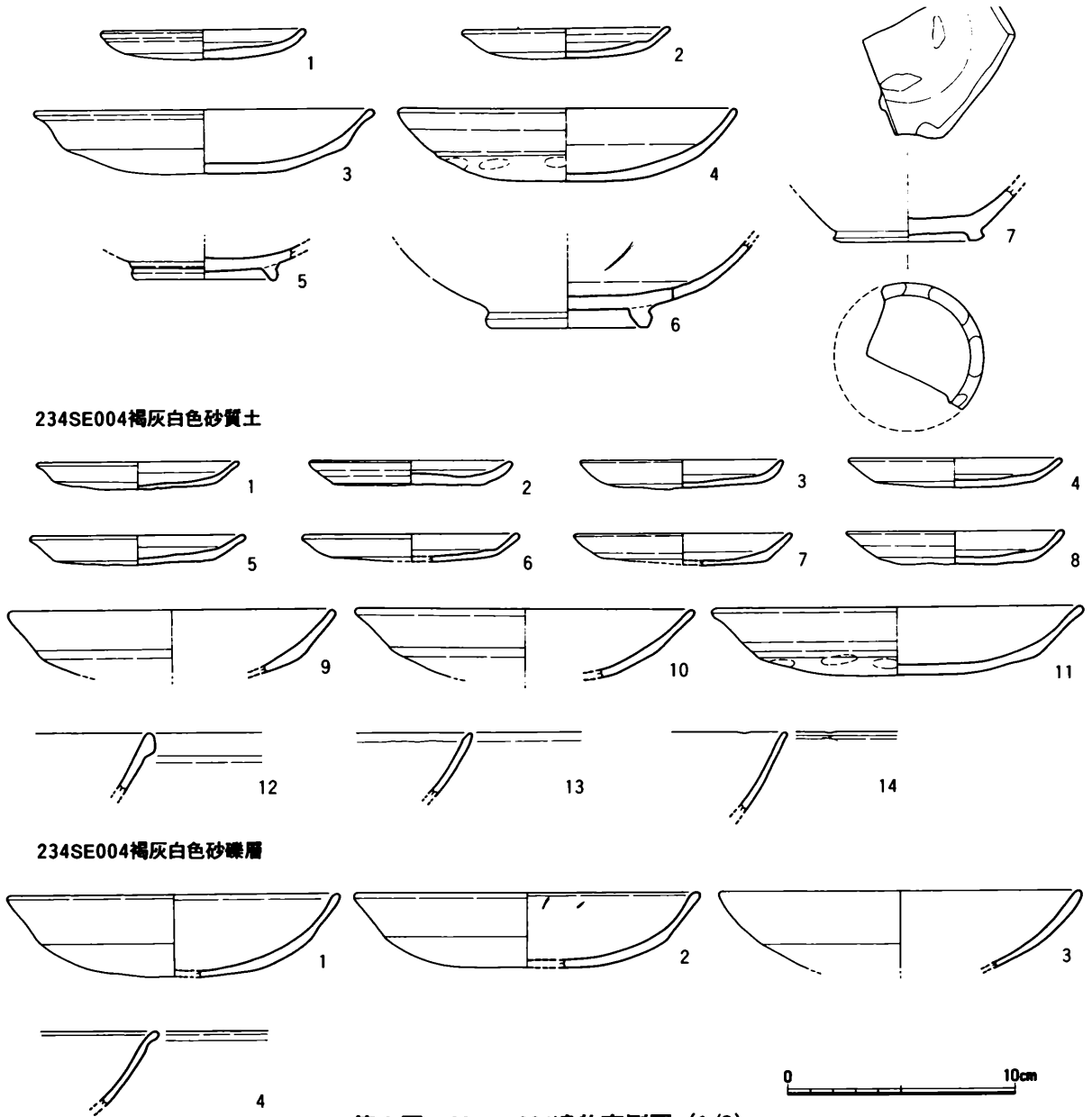
234SE004褐灰白色砂礫層（第８図）

土師器

丸底坏ａ（１～３）　口径14.6～16.0cm、残存高・器高3.3～3.6cmを計測する。底部切り離しは全てヘラ切りであり、内面にはミガキｂが観察される。

白磁

椀（４） 口縁部から体部上半の破片である。XI－２類に分類される。



第８図 234SE004遺物実測図（1/3）

２）土坑出土遺物

234SK001黒色粘質土（第９図）

土師器

小皿ａ（１） 口径13.2cm、器高2.7cm、底径8.8cmを計測する。底部切り離しは糸切りである。

皿ａ（２） 口径22.4cm、器高3.5cm、底径18.3cmを計測する。底部切り離しは糸切りである。

坏ａ（３・４） 口径13.2cm、残存高・器高1.8～2.7cm、底径8.8cmを計測する。底部切り離しは３がヘラ切り、４が糸切りである。

白磁

椀（５） 体部下半から高台部の破片で、Ｖ類に分類される。

234SK001褐灰白色砂質土（第９図）

土師器

小皿ａ（１） 口径9.2cm、器高1.1cm、底径6.3cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りである。

坏ａ（２） 口径15.8cm、器高3.1cm、底径9.4cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りであり、底面には板状圧痕が観察される。

黒色土器Ａ類

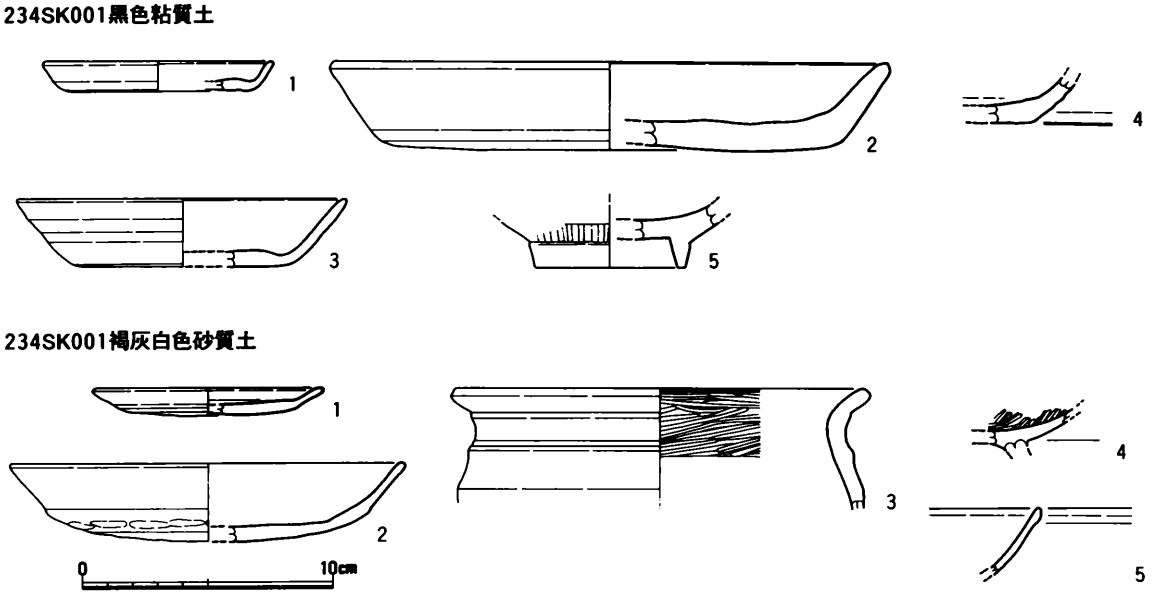
甕（３） 口径16.8cm、残存高4.6cmを計測する。口縁部はくの字状に屈曲し、外面は横ナデ、内面は横ナデ後にミガキ調整が施され、内面には煤が付着している。胎土は黄灰色を呈し、きめ細かい。

黒色土器Ｂ類

椀ｃ（４）残存高1.6cmを計測する。体部は内彎して立ち上がり、内面には回転ナデの後ミガキ、外面はナデ調整が施される。胎土は黒色を呈し、きめ細かい。

白磁

椀（５） 口縁部から体部上半の破片で、Ⅱ－１類に分類される。



第９図　234SK001遺物実測図（1/3）

234SK002明灰色粘質土（第10図）

土師器

坏ａ（１） 口径13.5cm、器高2.4cm、底径8.6cmを計測する。底部切り離しは糸切りである。

瓦質土器

鉢（２） 口径25.1cm、残存高5.0cmを計測する、体部上半の破片である。口縁部外面を横ナデ、体部内面は斜位のハケ調整、外面は疎らな斜位のナデを施す。

緑釉陶器

椀（３） 残存高1.3cmを計測する、体部下半の破片である。深緑色の緑釉が施釉され、胎土は灰色・

橙色を呈する。近江系。

不明施釉陶器

小皿（４） 口径9.1cm、残存高0.95cmを計測する。内面には暗茶褐色の鉄釉が施釉される。胎土は土師質で、橙色を呈し、きめ細かい。未分類。

青白磁

変形合子（５） 残存高1.9cm、底径4.2cmを計測する、変形合子の体部下半の破片である。底部は復元６角形を呈する。釉は淡青白色を呈し、胎土は白色である。未分類。

234SK002灰色土（第10・11図）

土師器

小皿ａ（１） 残存器高1.3cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りと思われる。

小皿ｃ（２） 口径12.6cm、器高2.3cm、底径8.2cmを計測する。

坏ａ（３・４） 口径12.4～15.2cm、器高2.4cm、底径8.4～10.8cmを計測する。底部切り離しは３・４共に糸切りである。

瓦器

椀（５） 口径20.0cm、残存器高4.2cmを計測する。体部は内彎して立ち上がり、外面にミガキｃが施される。内面は摩耗が著しく調整は不明である。

須恵質土器

甕（６） 残存高5.2cmを計測する、甕の肩部の破片である。外面には格子状の叩き、内面には横方向のハケ調整を施す。胎土は灰色を呈し、白色粒子を多く含み堅緻。

白磁

椀（７～16） ７～13はⅣ類に分類される口縁部から体部上半の破片である。14・15はⅣ－１ａ類に分類される底部破片。16はⅤ類に分類される底部破片で、高台内には十字状の墨書が書かれている。

皿（17） Ⅳ－１類に分類される底部から体部下半の破片である。

龍泉窯系青磁

椀（18～21） 18はＩ類、19はＩ－４類に分類される龍泉窯系青磁口縁部破片、20・21は底部から体部下半の破片である。20の内面には判読不明のスタンプが、21の高台内には×状の墨書が書かれており、Ｉ類に分類される。

青白磁

合子（22） 口径6.2cm、器高1.5cmを計測する。外面には花弁文様が施され、釉は明緑灰色を呈する。胎土は白色を呈し、硬質である。

中国陶器

耳壺（23） 底径7.2cm、残存高6.2cmを計測する、底部から体部下半の破片。外面には淡灰緑色の釉が施釉され、胎土は灰白色を呈し、硬質である。Ⅴ類ないしはⅥ類に分類される。

鉢（24） 口径23.2cm、残存器高4.5cmを計測する、口縁部から体部上半の破片である。Ｉ－１ｃ類。

石製品

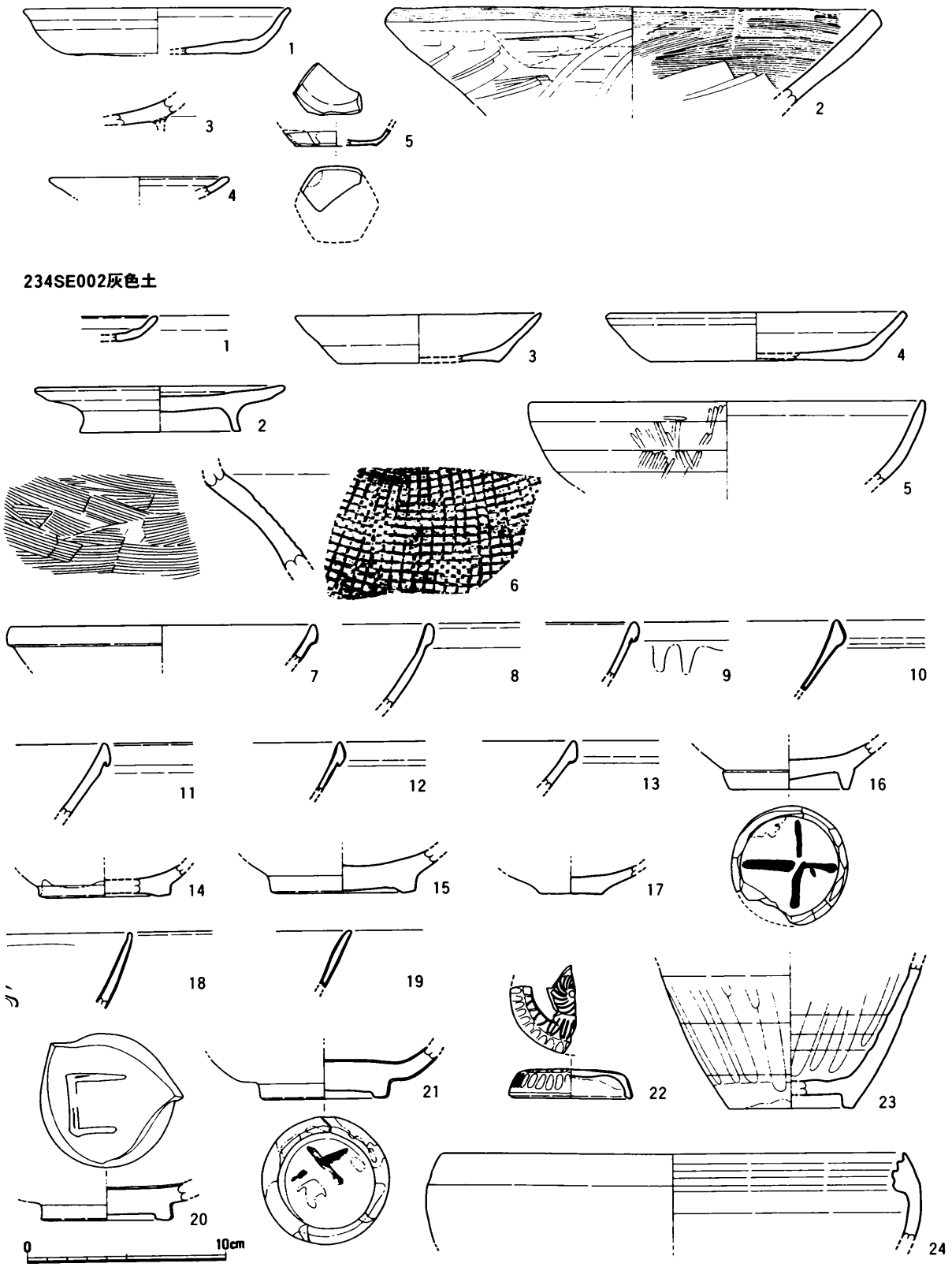
石鍋（25） 滑石製石鍋Ｂ－１群の口縁部から体部上半の破片である。残存高6.5cmを計測し、一ヶ所の穿孔が残存している。内面の一部には叩打痕跡が観察され、何らかの目的に転用されたと推定される。

瓦

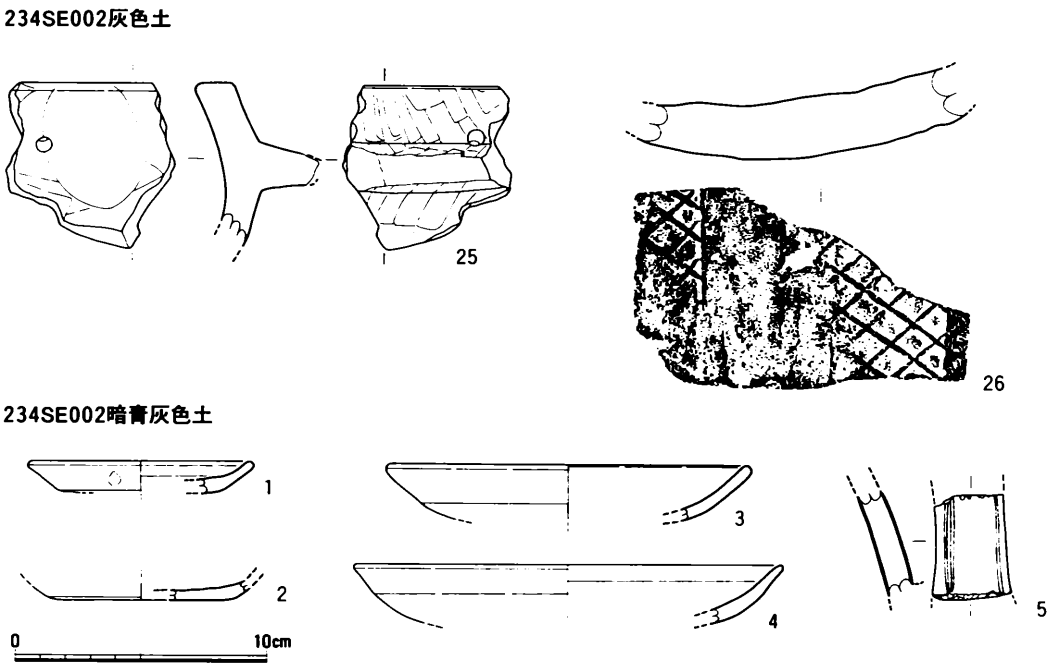
格子瓦（26） 26は凸面に菱形の格子目が施された瓦である。Ｉ－Ｃ類

234SE002明灰色粘質土

234SE002灰色土



第10図　234SK002遺物実測図１（1/3）



第11図　234SK002遺物実測図２（1/3）

234SK002暗青灰色土（第11図）

不明施釉陶器

坏（１）　口径10.0cm、残存高1.3cm、底径6.5cmを計測する。内外面はナデ調整が施され、外面には僅かに鉄釉が付着している。胎土は土師質で、淡橙色を呈し、きめ細かい。未分類。

土師器

坏ａ（２）　残存高0.8cm、底径7.5cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りである。

丸底坏（３・４）　口縁部から体部上半の破片で、口径14.6・17.1cm、残存高2.2cmを計測し、内面にはミガキｂが観察される。

青白磁

水注（５）　残存高4.3cmを測る、水注の把手の破片である。釉は青白色を呈する。胎土は白色を呈し、硬質である。

２）流路出土遺物

234SX003黒色砂質土（第12～15図）

土師器

小皿ａ（１～８）　口径8.6～10.2cm、器高1.1～1.5cm、底径5.0～8.7cmを計測する。底部切り離しは２が糸切りである他は全てヘラ切りである。

小皿ｃ（９～12）　口径9.6～10.8cm、器高1.9～2.1cm、底径9.6～10.8cmを計測する。

坏ａ（13・14）　口径11.2・13.6cm、器高2.0・2.1cm、底径7.0・8.0cmを計測する。13・14共に底部には板状圧痕が観察される。

丸底坏ａ（15～19）　口径15.4～15.9cm、残存高・器高2.6～3.6cmを計測する。底部切り離しは16が糸切りである他はヘラ切りであり、16・17・19の外面底部には板状圧痕が観察される。

丸底坏ｃ（20・21） 口径16.3・12.6cm、器高3.7・3.4cmを計測する。

椀ｃ（22～24） 残存高2.9～4.0cm、底径6.6～8.0cmを計測し、24は外面にミガキｃ、内面は研磨されている。

手捏（25） 残存高3.4cm、底径3.0cmを計測する。内外面に指頭圧痕が観察される。胎土はきめ細かく、角閃石が含まれる。

器台（26・27） 残存高15.4・6.6cmを測り、26は断面８角形、27は円形を呈する。

鉢（28） 残存高15.7cmを計測し、内外面共に、口縁部には横ナデ、体部上位にはヘラナデ、中位にはミガキｃ調整が施され、下半には指頭圧痕が観察される。

甕（29～33） 29は外面に叩きが施される体部破片、30～33はナデ調整により成形され、32の口縁部内外面には指頭痕が観察される。

黒色土器Ａ類

椀（34） 口径17.2cm、器高5.3cm、底径6.7cmを計測する。内外面にミガキｃが施される。

黒色土器Ｂ類

椀ｃ（35・36） 35は口径15.4cm、器高5.6cm、底径6.0cmを計測し、内外面にミガキｃが施される。36は残存高4.0cm、底径7.0cmを計測する、体部下半から底部の破片である。高台内には焼成前に「井」が線刻され、内外面にミガキｃが施される。

瓦器

小皿ａ（37） 口径10.5cm、器高2.3cm、底径7.6cmを計測する。底面切り離しはヘラ切りで、板状圧痕が残り、内外面にはミガキｃが施される。

椀ｃ（38） 口径16.0cm、器高5.2cm、底径5.7cmを計測する。内外面にミガキｃ、口唇部内面には一条の沈線が巡らされている。畿内系の瓦器であろう。

土製品

坩堝（39） 口径12.3cm、器高7.1cmを計測する。外面はナデ調整が施され、器壁は厚い。内面には銅滓が付着している。

須恵質土器

鉢（40～45） 口縁部を玉縁状に作る篠窯の製品である。40は口径21.4cm、器高10.1cm、底径10.0cmを計測する。

片口捏鉢（45） 口径27.0cm、残存高8.5cmを計測する、東播系の片口捏鉢の口縁部から体部下半の破片である。

瓶（46） 荒尾産の可能性がある瓶の口縁部破片で、口径14.4cm、残存高3.4cmを計測する。

甕（47） 頸部から体部上半の破片で、外面は敲き調整が施される。

緑釉陶器×二彩陶器

瓶（48） 口径20.0cm、残存高2.0cmを計測する。朝顔形に大きく外反し、内外面に緑釉が施釉される。胎土は灰黄色を呈し、緻密である。二彩陶器である可能性もある。

緑釉陶器

椀（49） 残存高1.5cm、底径5.0cmを計測する。内外面に濃緑色の緑釉が施釉されており、胎土は淡黄灰を呈し、軟質である。防長系の製品である。

灰釉陶器

椀（50～52） 50は残存高3.2cmを計測する、口縁部から体部上半の破片。内外面には灰青色の灰釉が施釉され、胎土は黒灰色を呈し、硬質である。51・52は底部から体部下半の破片で、残存高2.0・2.1cm、

底径6.6・9.0cmを計測する。K－90窯式併行の製品である。

白磁

椀（53～89） 53はⅡ－1類、54はⅡ－4類に分類される口縁部から体部上半の破片、55～57はⅡ類に分類される体部下半から底部の破片である。58はⅣ－1類、59・60はⅣ－2類に分類される口縁部から体部下半の破片、61～69はⅣ－1a類に分類される体部下半から底部の破片である。70～85は口縁部を玉縁状に仕上げるⅣ類の口縁部から体部上半の破片である。86はⅤ－1c類あるいはⅤ－4b類かⅤ－4c類、87・88はⅤ類に分類される体部下半から底部破片である。89はⅤ－1b類に分類される口縁部から体部上半の破片である。

皿（90～98） 90～93・96～98はⅣ－1a類、94・95はⅣ－1b類に分類される。

壺（99） 残存高6.7cm、底径8.7cmを計測する。Ⅱ類。

越州窯系青磁

椀（100～104） 100・101はⅠ－1a類、102・103はⅠ－1b類、104はⅠ－5類に分類される。

壺×水注（105） 残存高5.1cm、底径7.2cmを計測する、壺あるいは水注の底部から体部下半の破片である。磁器区分A期（大宰府編年Ⅴ～Ⅸ期、8世紀末～10世紀中頃）の製品である。

青白磁

瓶（106） 残存高3.1cmを計測する瓶の肩部の破片である。円形状の貼り付けが有り、耳壺の可能性もある。

石製品

石鍋（107・108） 滑石製石鍋A群に分類される口縁部から体部上半の破片である。外面には煤が付着している。

234SX003黒灰色砂質土（第16～20図）

土師器

小皿a（1～20） 口径8.6～11.2cm、器高1.2～1.8cm、底径6.5～8.3cmを計測する。底部切り離しは全てヘラ切りである。

小皿c（21～26） 口径9.9～13.6cm、器高1.7～2.1cm、底径5.9～8.0cmを計測する。

坏a（27～38） 口径10.4～16.1cm、残存高・器高2.0～3.8cm、底径6.5～12.0cmを計測する。27～30・34の口縁部から体部上半には煤が付着しており、灯明具としての使用されたものと推定される。底部切り離しは27～36がヘラ切り、37・38が糸切りである。

丸底坏a（39～44） 口径14.8～16.6cm、残存高・器高2.8～3.6cmを計測する。40・43・44は丸底化は図られているものの、平底に近い形状である。底部切り離しは全てヘラ切りであり、40～43の外面底部には板状圧痕が観察される。

丸底坏c（45～47） 口径15.4cm、残存高・器高2.5～5.4cmを計測する。底部切り離しは45・46がヘラ切りであり、47は不明である。

椀c（48～57） 口径12.4cm、残存高・器高2.3～4.5cm、底径7.1～8.6cmを計測し、52の内面には煤が付着している。底部切り離しは全てヘラ切りであり、50～53・55～57の高台内には板状圧痕が観察される。

坏×椀（58） 残存高1.5cm、底径7.4cmを計測する、薩摩・日向系の坏あるいは椀の底部から体部下半の破片である。調整はナデ調整により成形され、高台は充実高台で底部切り離しは糸切りである。胎土は橙色を呈し、白色粒子を含みきめ細かい。

器台（59・60） 残存高16.3・6.3cmを計測する。59は断面円形、60は不規則な７角形を呈する。

鉢（61・62） 口径17.4cmを計測する、口縁部から体部上半の破片である。内面はナデ調整により仕上げられており、外面には煤が付着している。62は口縁部から体部下半の破片で、器形は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部内外面は横ナデ調整、口縁部以下の内外面にはヘラナデの後ヘラミガキ調整が施される。

甕（63～67） 63は口径21.0cmを計測する、口縁部から体部下半の破片で、口縁部内外面は横ナデ、体部上半以下の外面は板状工具による叩き、内面には粗いハケ調整が施される。甕ｂに分類される。64は口縁部から頸部の破片で、内外面には横ナデ調整が施される。65は口径27.0cmを計測する、口縁部から体部下半の破片であり、口縁部内外面および体部内面には横ナデ調整、体部外面には縦ヘラ削り調整が施される。66は口縁部の屈曲が浅い甕の破片で、口縁部内外面にナデ調整が施されるが、体部内外面の調整は摩耗・煤の付着により明瞭ではない。67は口径13.4cmを計測する小形の甕で、口縁部・体部内外面共にナデにより成形されており、外面には煤が付着している。

内耳鉢×火鉢（68） 口径22.0cmを計測する。体部は内彎して立ち上がり、内面に一ヶ所内耳が残存している。口縁部は横ナデで仕上げられているが、それ以外は摩耗が著しく調整は不明である。

黒色土器Ｂ類

椀（69～70） 口径16.0・17.0cmを計測し、内外面にミガキｃが施される。

椀ｃ（71～72） 口径14.6、残存高・器高2.2～4.7cm、底径6.6～7.0cmを計測し、内外面にミガキｃが観察される。

大椀ｃ（73） 残存高2.9cm、底径9.8cmを計測する。内外面共に摩耗が著しい。

台付椀（74） 口径16.0cm、器高7.3cm、底径7.8cmを計測する。内外面にミガキｃが観察され、底部の貼り付け高台は二重になる。

瓦器

椀ｃ（75） 口径16.6cm、器高4.9cm、底径7.2cmを計測し、内外面にミガキｃが観察される。

須恵質土器

椀（76） 口径14.2cm、器高5.4cm、底径5.0cmを計測する。体部は彎曲して立ち上がり、口唇部は短く外反する。内外面は回転ナデ調整により成形され、胎土は暗灰色を呈し、白色粒子･黒色粒子を含み、硬質である。底部切り離しは糸切りである。

捏鉢（77） 東播系の捏鉢で、口縁部から体部上半の破片である。

鉢（78～83） 口縁部を玉縁状に作る篠窯の口縁部から体部上半の破片である。

緑釉陶器

椀（84～88） 口径11.6cm、残存高・器高1.1～4.5cm、底径6.2～7.4cmを計測する。内外面に濃緑色の緑釉が施釉されており、胎土は淡橙色を呈する。全て近江系である。

白磁

椀（89・90・93～107・111～113・116） 89はⅡ－０類あるいはⅡ－１類に分類される椀の口縁部から体部下半の破片、90はⅡ類に分類される底部から体部下半までの破片である。

93～98はⅣ－１ａ類に分類される底部から体部下半の破片で、96の高台内には「介」と思われる墨書が書かれている。99・100はⅣ－１ｂ類、101はⅣ－２ａ類。102はⅣ－ａ類に分類される口縁部から体部上半・下半の破片、103～107はⅣ類の口縁部から体部上半・下半の破片である。111はⅤ－２ａ類の口縁部から底部の破片、112･113はⅤ類の底部破片である。116はⅫ類の椀で、高台内には「能」と思われる墨書が書かれている。

皿（91・92・108～110・114・115） 91・92はⅡ－１ａ類に分類される皿の口縁部から底部までの破片である。108はⅥ－１ａ類、109はⅥ－ａ類、110はⅥ－１ｂ類に分類される口縁部から体部下半および底部の破片、114はⅤ－１ａ類、115はⅤ－２類に分類される口縁部から体部下半までの破片である。

耳壺（117） 117は耳壺のⅡ類に分類される肩～頸部の破片で、欠損した耳が一ヶ所観察される。

越州窯系青磁

椀（118～121） 118はⅠ－１ウ類に、119はⅠ－２ａア類、120はⅠ－２ウ類、121はⅡ－２ａ類に分類される底部から体部下半の破片である。Ａ期（Ⅴ～Ⅸ期、８世紀末～10世紀中頃）の製品である。

坏（122） Ⅰ類に分類される底部から体部下半の破片である。

大椀（123） Ⅰ－２ａア類に分類される底部から体部下半の破片である。

小椀（124） Ⅰ－ｂ類に分類される底部から体部下半の破片であり、外面には輪花に伴う篦押捺縦線文が施される。

瓦

文字瓦（125・126） 平瓦の凸面に斜格子文と「平井」の陽刻を施す。125はⅠ－７類。126はⅠ－12類と見られる。

石製品

石鍋（127・128） 127は滑石製石鍋Ａ群ないしはＢ群の口縁部破片である。128は滑石製石鍋の口縁部分の破片を転用した製品で、内面に二ヶ所の窪みが穿たれている。

234SX003黒褐色砂質土（第21図）

土師器

小皿ａ（１～６） 口径10.0～10.5cm、器高1.1～1.7cm、底径6.2～8.4cmを計測する。底部切り離しは２が糸切りである他はヘラ切りである。

小皿ｃ（７） 口径12.0cm、器高1.6cm、底径7.2cmを計測する。

坏ａ（８） 口径11.0cm、器高2.2cmを計測する。底部切り離しはヘラ切りである。

丸底坏ａ（９～12） 口径15.0～15.8cm、残存高・器高3.1～3.9cmを計測し、11の内面にはコテあて痕跡が明瞭に残る。

鉢（13） 口縁部から体部下半の破片で、器形は直線的に外傾して立ち上がる。内外面共にナデ調整で仕上げられおり、外面には煤が付着している。

甕（14） 口縁部から体部上半の破片で、内外面共にナデ調整により仕上げられている。

白磁

椀（15～17） 15はⅡ類に分類される底部破片、16はⅣ類に分類される口縁部から体部上半の破片、17はⅤ類に分類される口縁部から体部上半の破片である。

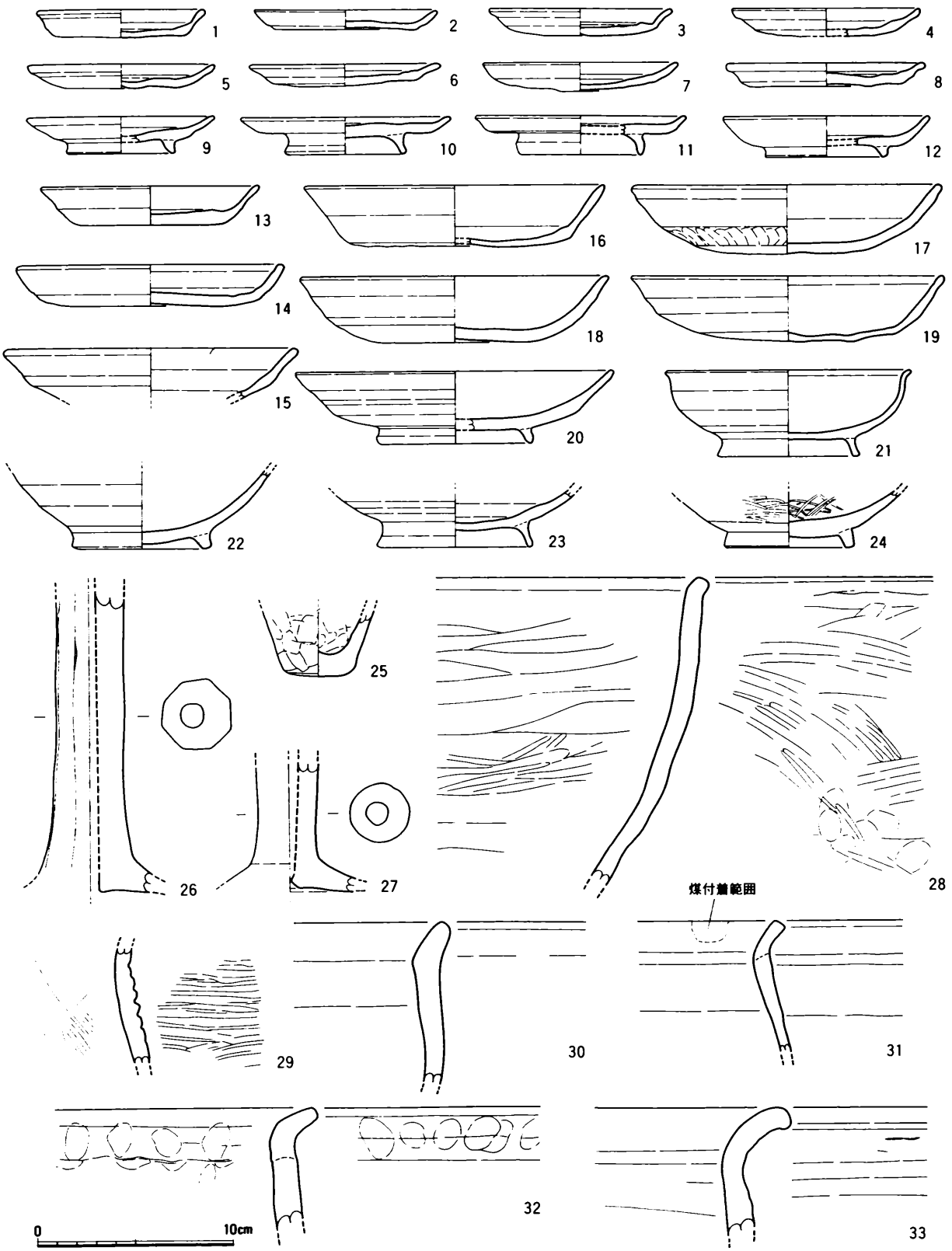
越州窯系青磁

椀（18） Ⅱ－２類に分類される底部から体部下半の破片である。磁器区分Ａ期（大宰府編年Ⅴ～Ⅸ期、８世紀末～10世紀中頃）の製品。

瓦

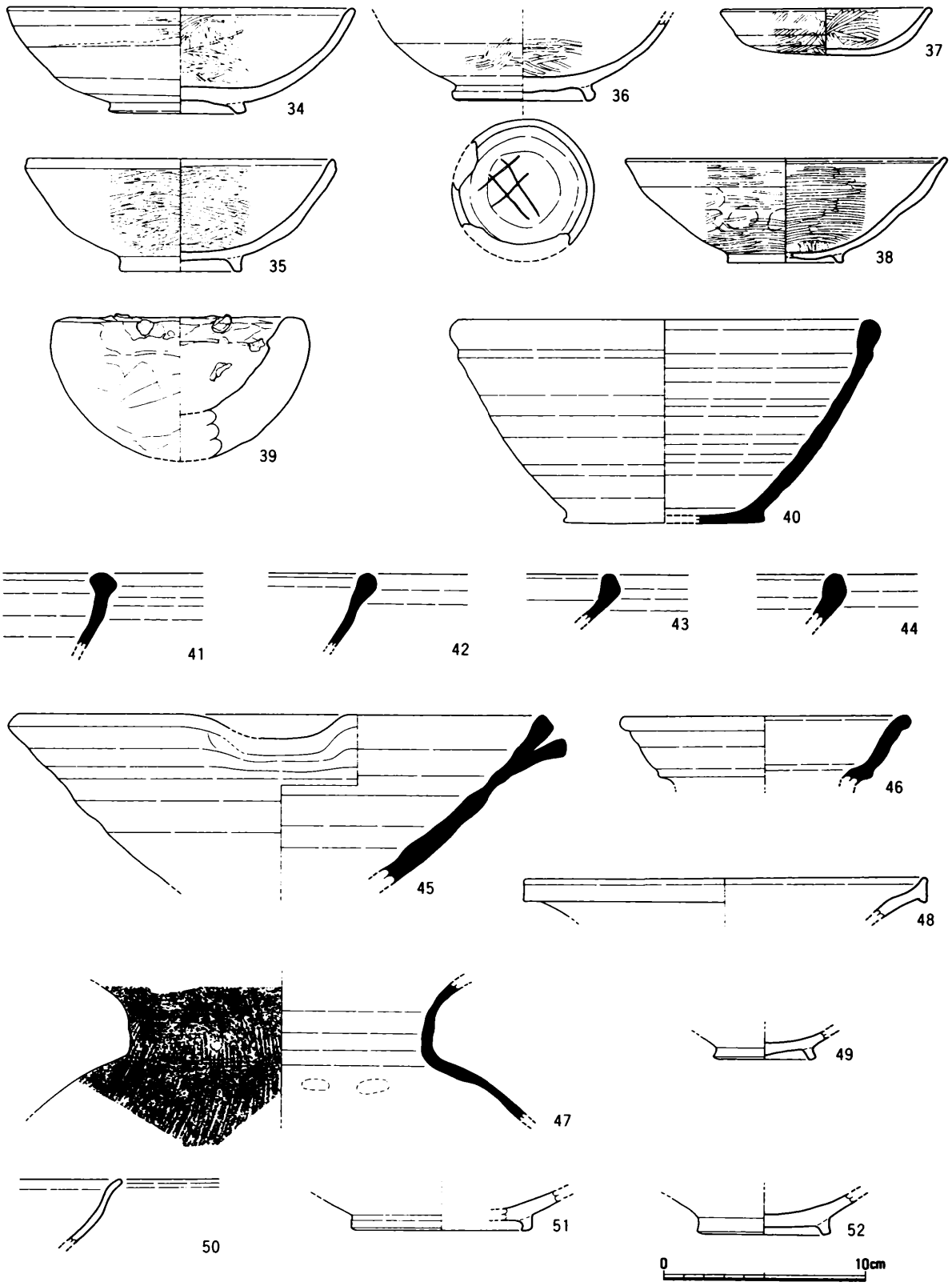
文字瓦（19） 丸瓦の凸面に斜格子と「平井」の文字が陽刻される。Ⅰ－７類。

234SX003黒色砂質土



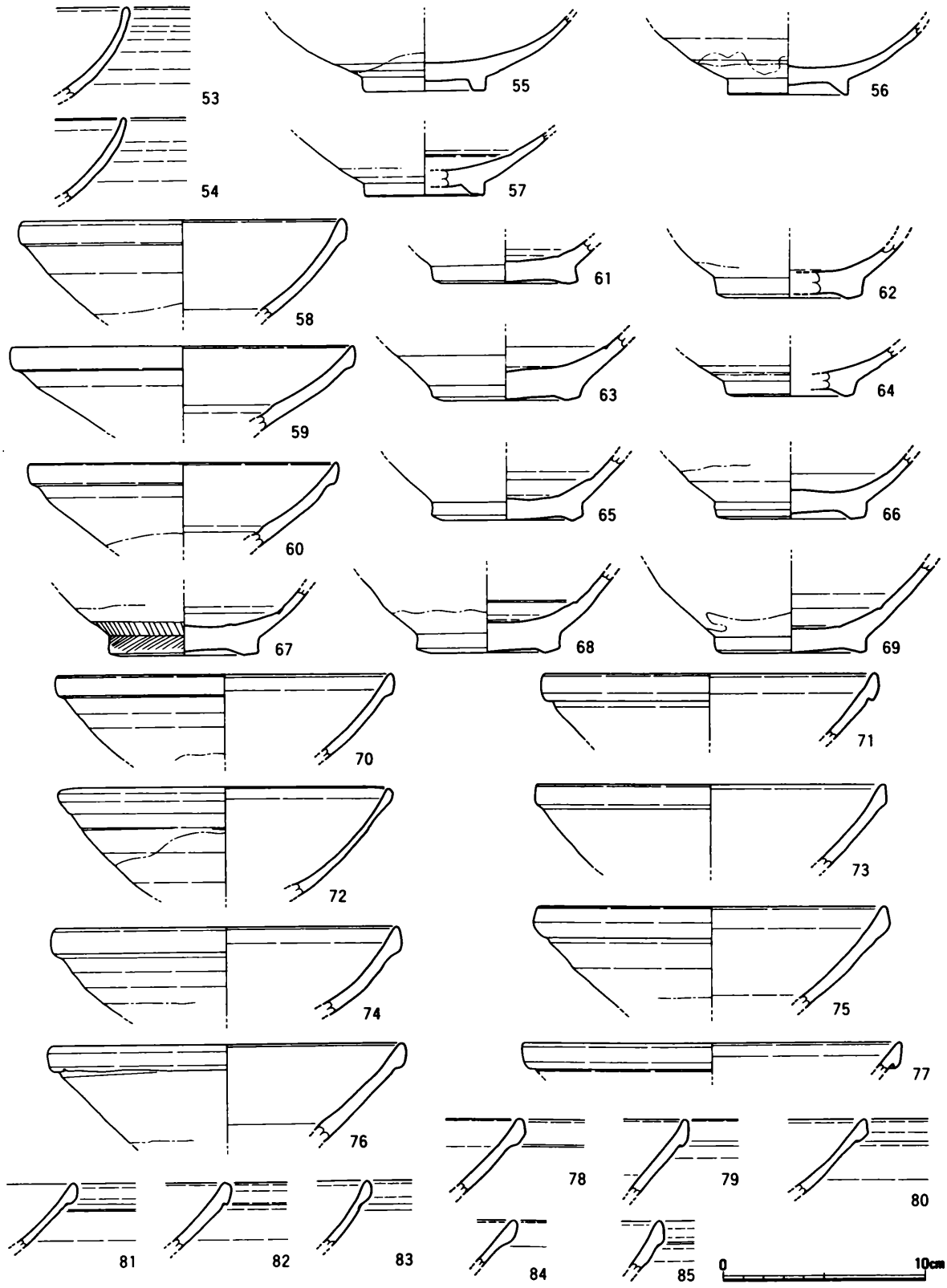
第12図　234SX003遺物実測図1 (1/3)

234SX003黒色砂質土



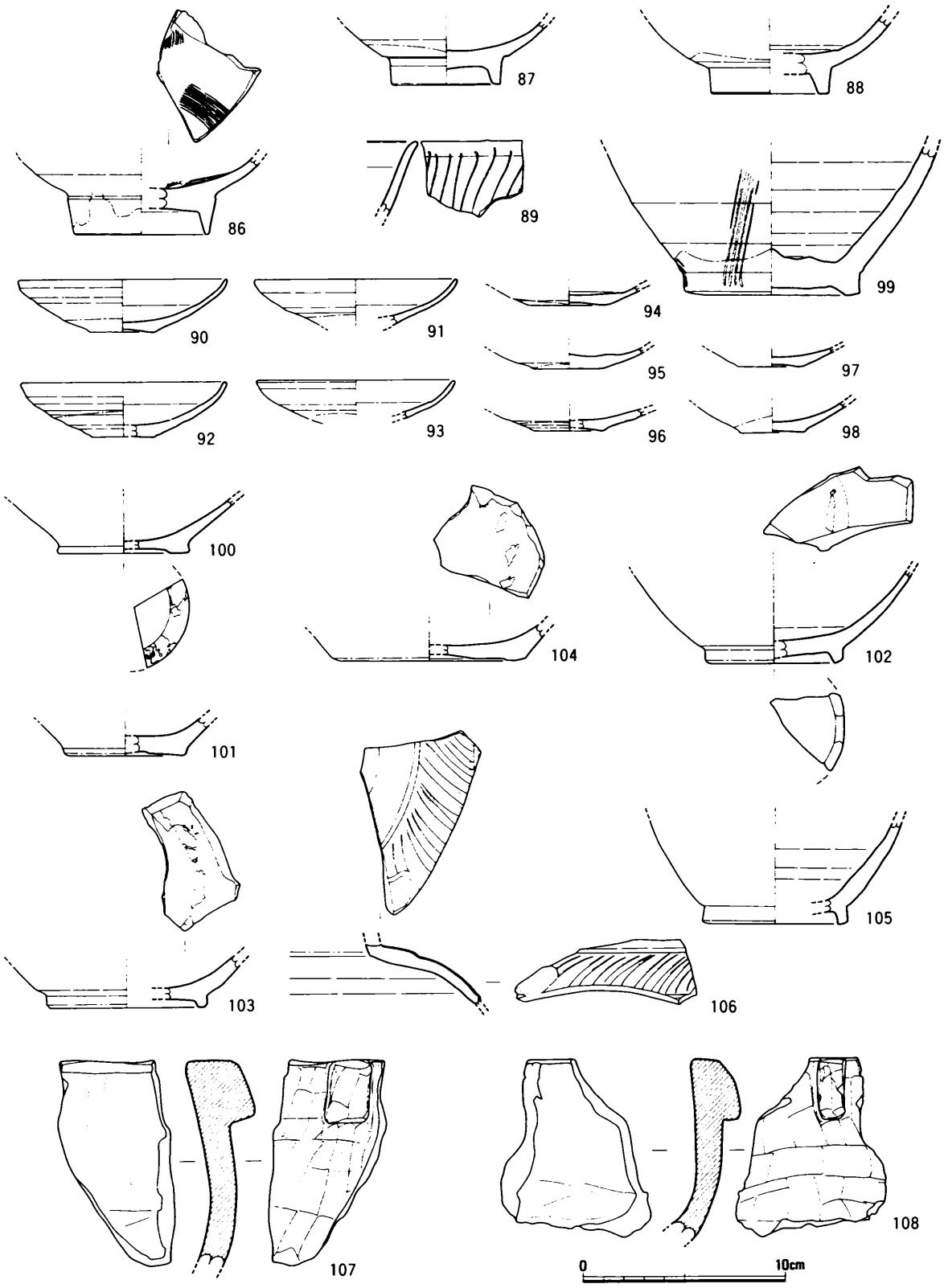
第13図　234SX003遺物実測図２（1/3）

234SX003黒色砂質土

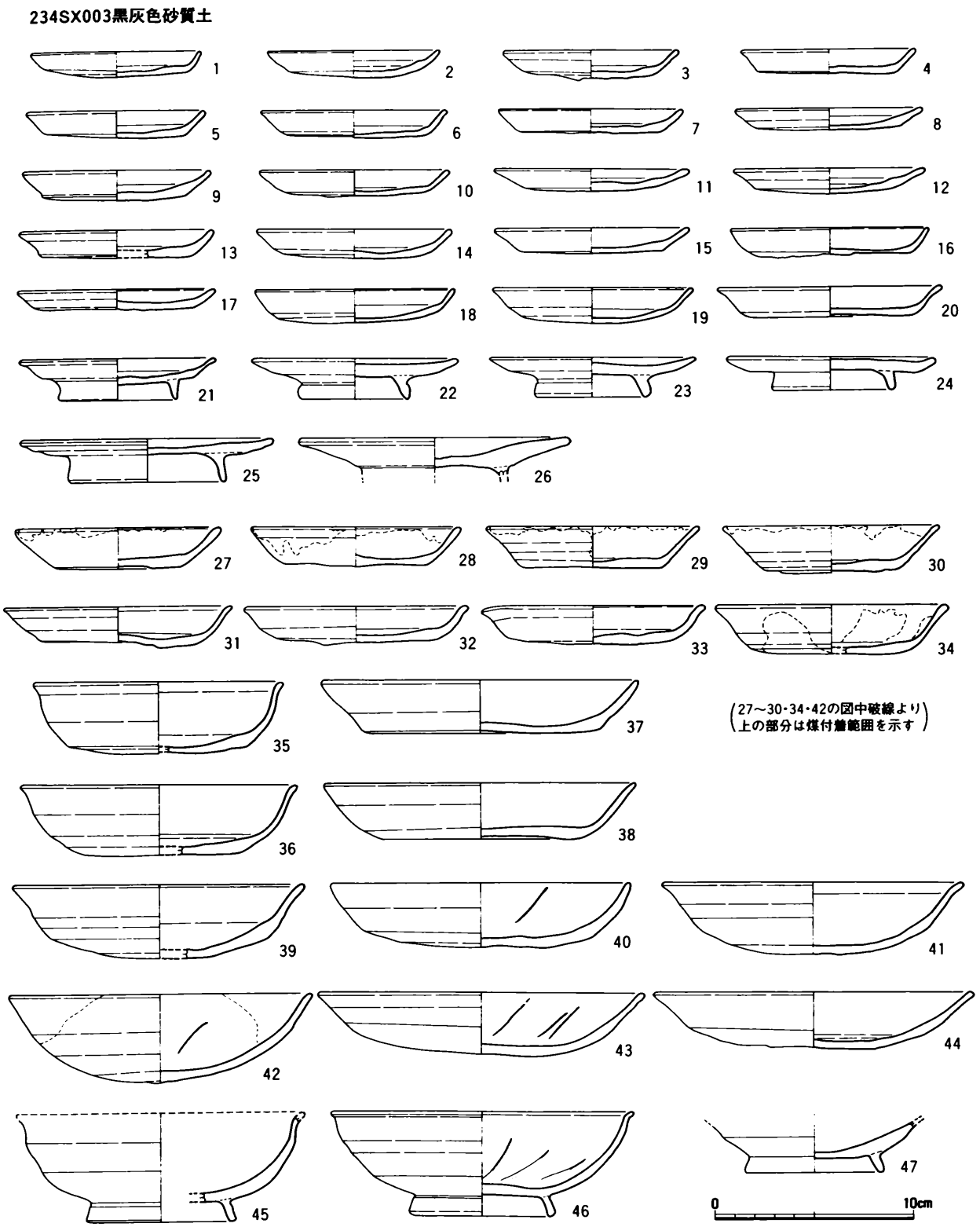


第14図　234SX003遺物実測図３（1/3）

234SX003黒色砂質土

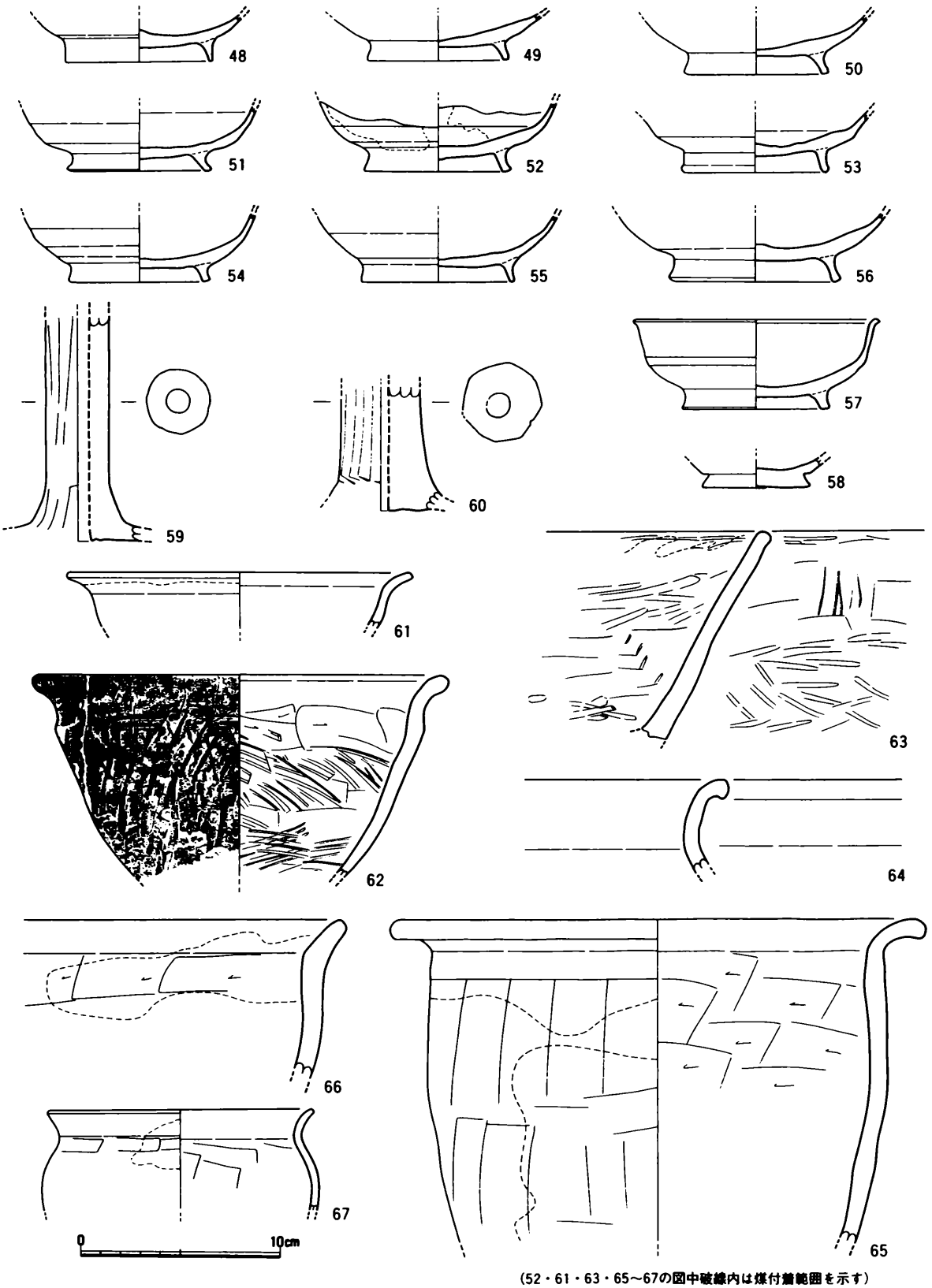


第15図　234SX003遺物実測図 4 （1/3）



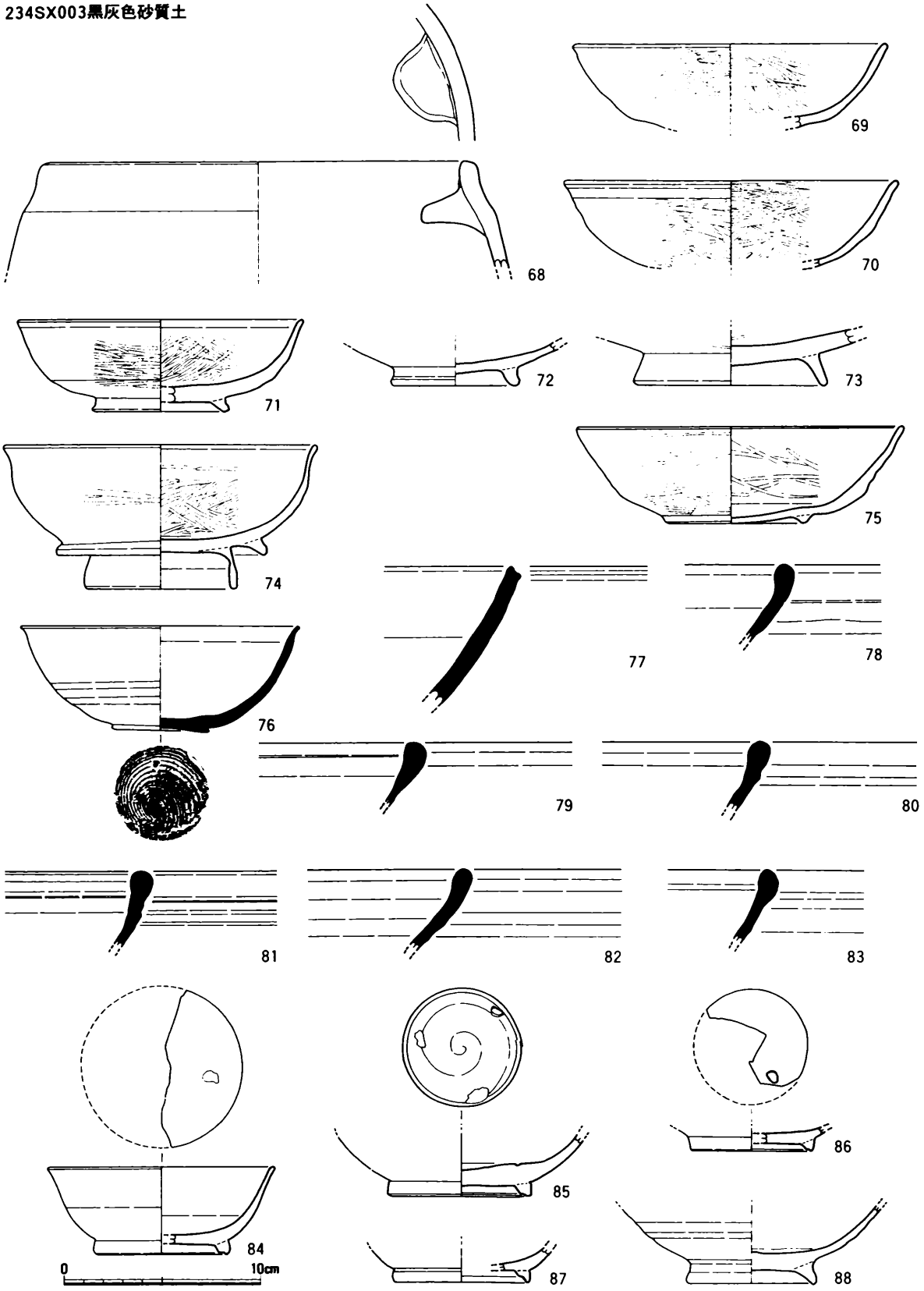
第16図　234SX003遺物実測図５（1/3）

234SX003黒灰色砂質土



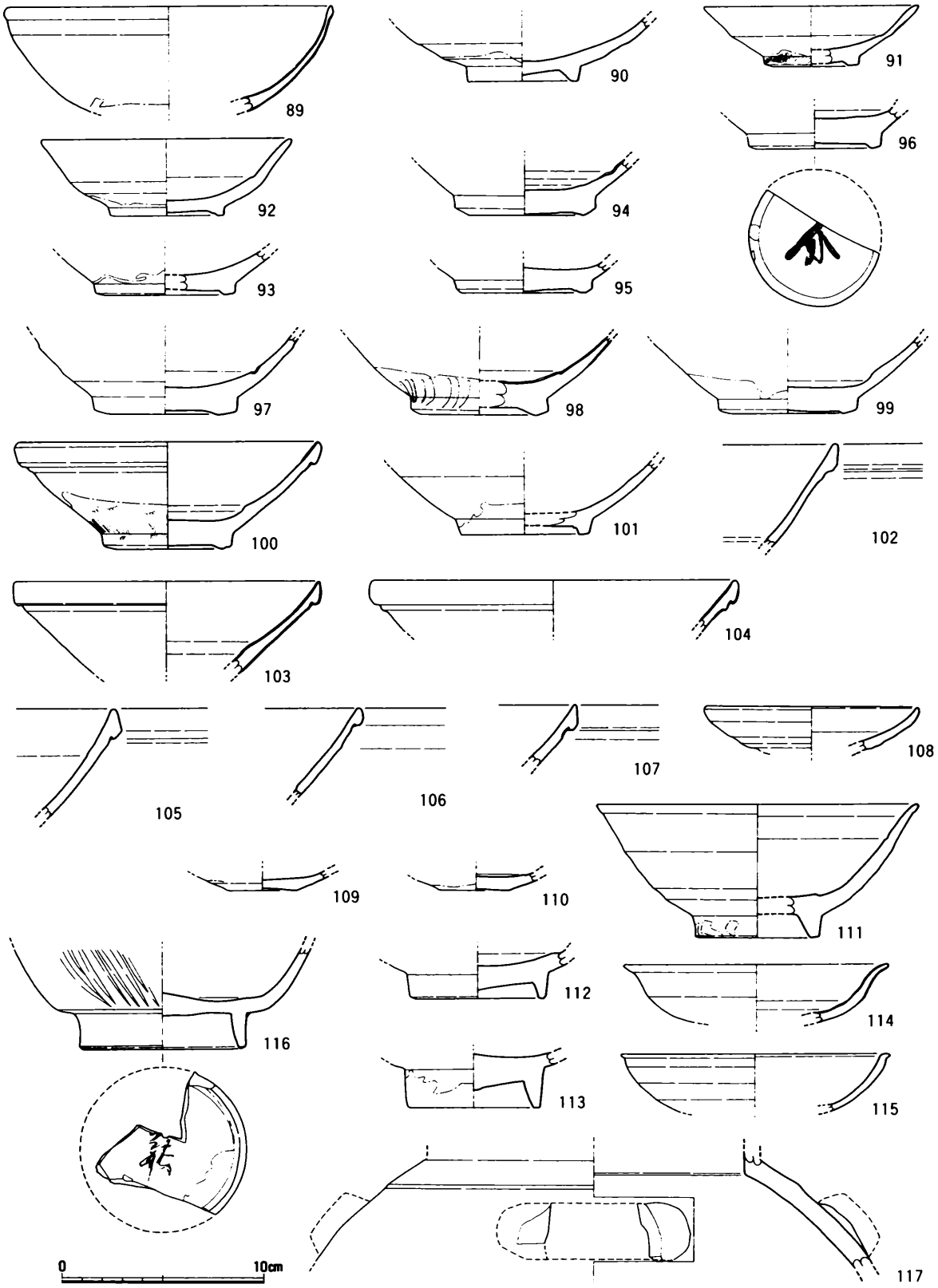
(52・61・63・65～67の図中破線内は煤付着範囲を示す)

第17図　234SX003遺物実測図6 (1/3)



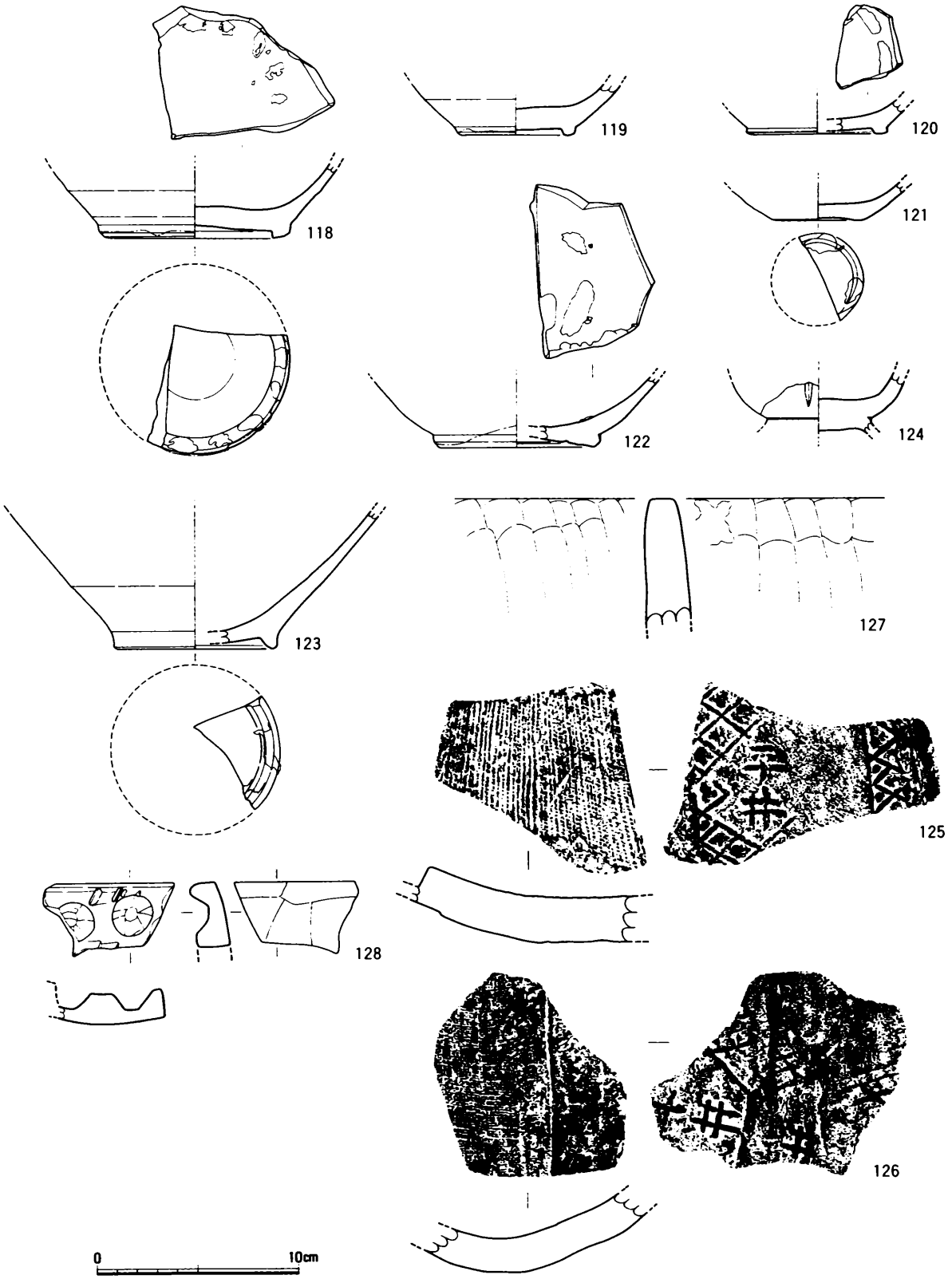
第18図　234SX003遺物実測図7　(1/3)

234SX003黒灰色砂質土



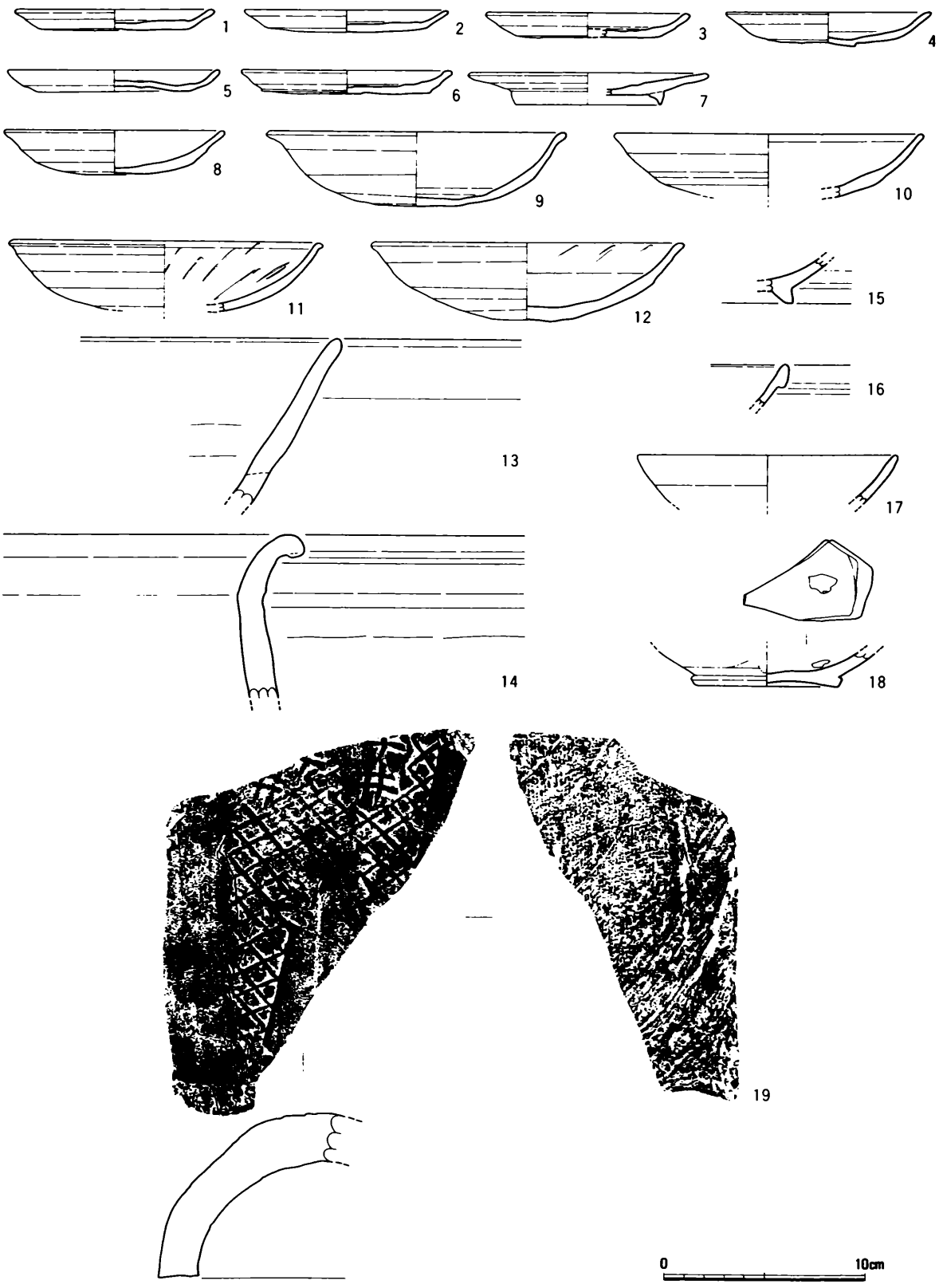
第19図　234SX003遺物実測図８（1/3）

234SX003黒灰色砂質土



第20図　234SX003遺物実測図９（1/3）

234SX003黒褐色砂質土



第21図　234SX003遺物実測図10（1/3）

V．小　結

今次調査区は御笠川の南側に位置し、鏡山猛による大宰府条坊復元案の左郭８・９条５坊に当たる。

調査の結果、本地点は御笠川の氾濫原・旧流路に踏み込んだ地形にあたり、検出された遺構も土坑２基（SK001･002）と井戸１基（SE004）と僅少であり、土地利用や人的活動は低調な地域であることが判明した。

各遺構の時期・様相を述べると、SK001とSE004は磁器区分Ｃ期（大宰府編年Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）、SK002は磁器区分Ｄ期（大宰府編年ⅩⅣ～ⅩⅤ期、12世紀中葉～13世紀初頭）に埋没年代が推定される。調査面積の約½を占める流路（SX003）については当初、225次調査で検出された流路（225SD060）との連続性を考慮して調査を行ったが、結果として遺物相･土層が全く異なり、別の流路と判断された。存続期間については、恒常的に存在する河川であれば、出土遺物は幅広い時期にわたり混在することが予想されるが、SX003では磁器区分Ａ期（大宰府編年Ⅴ～Ⅸ期、８世紀末～10世紀中頃）の遺物が若干混在するものの磁器区分Ｃ期（大宰府編年Ⅻ～ⅩⅢ期、11世紀後半～12世紀前半）の遺物が大半を占めている。磁器区分Ｃ期に埋没年代が推定されるSE004が流路上に構築されていることや遺物の時期的偏在を併せて勘案すると、本流路は御笠川の氾濫時に一過的に出現し、短時間のうちに埋没したものと考えられる。また、出土遺物の多くは流水時のローリングによる摩滅が少なく、供給源が近隣地域であることを窺わせる。

以上、今次調査の成果について概観したが、大宰府条坊跡内の御笠川周辺氾濫原地域での調査報告は今次を含め、第171・124・148・225次と近年刊行が相次いでいる。結果として氾濫原地域での土地開発・進出の様相は条坊内でも遺構数や分布の濃淡・時期、流路の消長など様々で、決して一律のものではないことが明らかになりつつある。今後は周辺地域での調査の進展に伴い、さらなる解明が期待される。

引用・参考文献

鏡山 猛　1967『大宰府都城の研究』風間書房

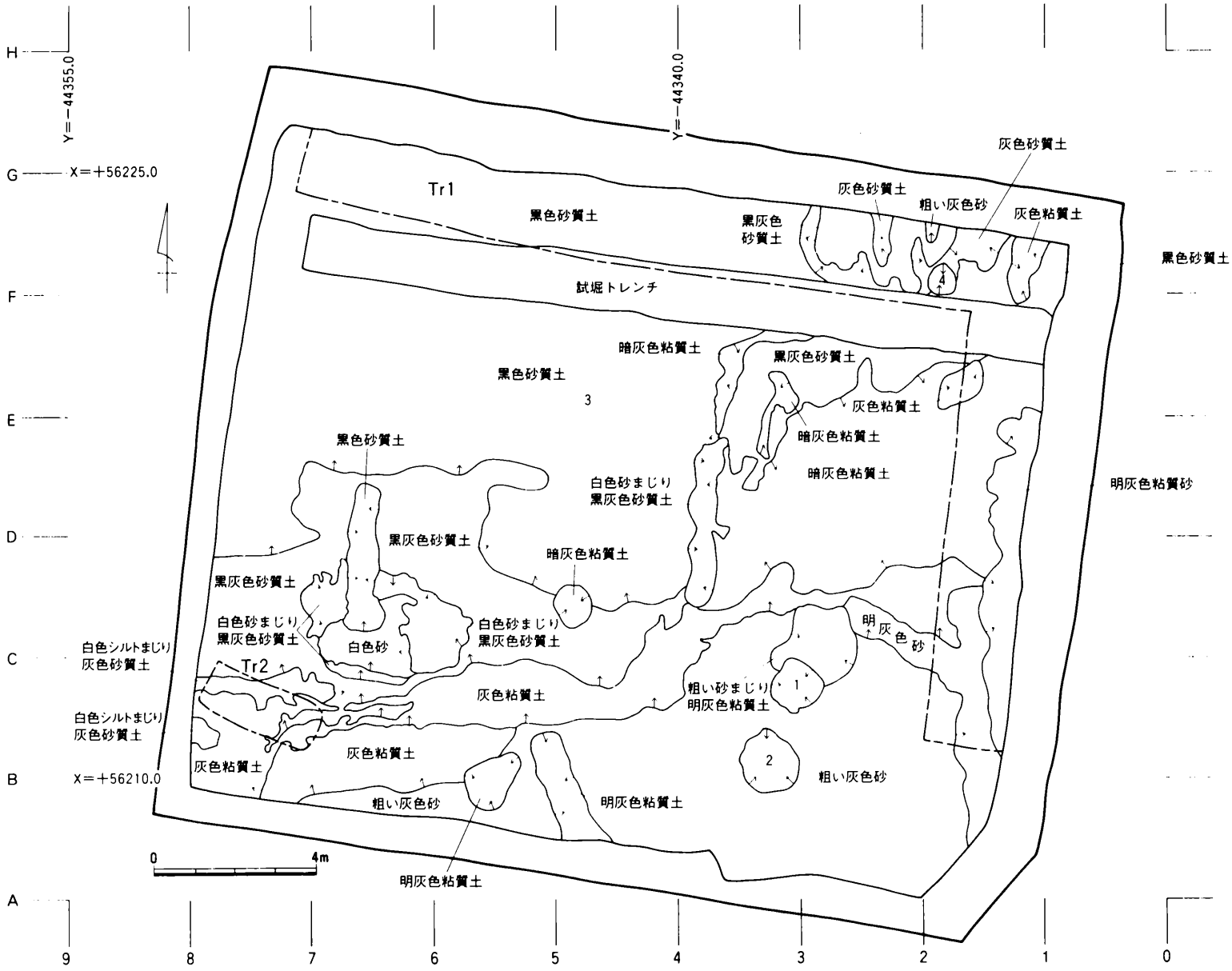
太宰府市史編纂委員会　1992『太宰府市史 考古資料編』太宰府市

香川達郎　2001「大宰府条坊跡XVⅢ－第212次調査－」太宰府市の文化財第57集　太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所

宮崎亮一・山村信榮他　2004「大宰府条坊跡24－第124・135・146・148・171・191・202・205次調査－」太宰府市の文化財第71集　太宰府市教育委員会

北平朗久他　2004「大宰府条坊跡25－第230次調査－」太宰府市の文化財第75集　太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所

香川達郎　2004「大宰府条坊跡26－第225次調査－」太宰府市の文化財第76集　太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所



第22図　大宰府条坊跡第234次調査遺構略測図（1/150）

大宰府条坊跡第234次調査　遺構番号台帳

S－番号	遺構番号	種別	埋積土状況（古→新）	位置
1	SK001	土坑	褐灰白色砂質土→茶褐色土→明灰色粘質土→暗灰色粘質土→黒灰色粘質土→黒色粘質土	B２・３
2	SK002	土坑	暗青灰色土→灰色土→明灰色粘質土	A・B２・３
3	SX003	旧流路	青灰色粘質土→黄褐灰砂礫層→黒褐色砂質土→黒灰色砂質土→黒色砂質土→暗灰色粘質土	D～G１～７
4	SE004	井戸	灰白色粘質土→褐灰白色砂礫層→褐灰白色砂質土→黒色粘質土	F２

大宰府条坊跡第234次調査　土師器計測表（１）

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S－１黒色粘質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－005	(13.2)	2.7	(8.8)	○	×	
2	土師器	皿ａ（イト）	R－002	(22.4)	3.5	(18.3)	○	×	
3	土師器	坏ａ（ヘラ）	R－003	(13.2)	2.7	(8.8)	○	×	
4	土師器	坏ａ（イト）	R－004	－	1.8＋α	－	○	×	

S－１褐灰白色砂質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－003	(9.2)	1.1	(6.3)	○	×	
2	土師器	坏ａ（ヘラ）	R－002	(15.8)	3.1	(9.4)	○	○	
3	土師器	坏ａ（ヘラ）	R－003	(13.2)	2.7	(8.8)	○	×	

S－２明灰色粘質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	坏ａ（イト）	R－005	(13.5)	2.4	(8.6)	○	×	

S－２灰色土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿ａ（ヘラ？）	R－024	－	1.3＋α	－	○	－	
2	土師器	小皿ｃ	R－025	(12.6)	2.3	8.2	○	－	
3	土師器	坏ａ（イト）	R－022	(12.4)	2.4	(8.4)	○	－	
4	土師器	坏ａ（イト）	R－003	(15.2)	2.4	(10.8)	○	○	

S－２暗青灰色土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿	R－004	(10.0)	1.3＋α	(6.5)	○	×	外面釉付着
2	土師器	坏ａ（ヘラ）	R－005	－	0.8＋α	(7.5)	○	○	
3	土師器	丸底坏	R－002	(14.6)	2.2＋α	－	×	×	
4	土師器	丸底坏	R－003	(17.1)	2.3＋α	－	×	×	

S－３黒色砂質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－091	8.6	1.5	8.7	○	○	
2	土師器	小皿ａ（イト）	R－085	(9.4)	1.3	(7.2)	○	○	
3	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－083	(9.4)	1.4	(6.4)	○	○	
4	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－084	(9.6)	1.5	(5.0)	○	○	
5	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－086	(9.6)	1.3	(5.8)	○	○	
6	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－088	9.8	1.1	7.4	○	○	
7	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－087	10.0	1.5	8.0	○	○	
8	土師器	小皿ａ（ヘラ）	R－089	10.2	1.2	7.8	○	○	
9	土師器	小皿ｃ	R－076	(9.6)	1.9	(5.6)	○	×	
10	土師器	小皿ｃ	R－073	(10.6)	1.9	(6.2)	○	×	
11	土師器	小皿ｃ	R－074	(10.8)	2.0	(6.2)	○		
12	土師器	小皿ｃ	R－075	(10.6)	2.1	(6.2)	○	×	
13	土師器	坏ａ	R－082	(11.2)	2.0	(7.0)	○	○	
14	土師器	坏ａ	R－081	(13.6)	2.1	(8.0)	○	○	
15	土師器	丸底坏ａ（ヘラ）	R－093	(15.0)	2.6＋α				
16	土師器	丸底坏ａ（イト）	R－095	15.4	3.1		○	○	
17	土師器	丸底坏ａ（ヘラ）	R－092	15.8	3.6		×	○	
18	土師器	丸底坏ａ（ヘラ）	R－094	(15.8)	3.4		×	×	

大宰府条坊跡第234次調査　土師器計測表（2）

A：内底ナデ　B：板状圧痕

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
19	土師器	丸底坏a	R－096	15.9	3.4		×	○	
20	土師器	丸底坏c	R－067	16.3	3.7	7.9	－	×	
21	土師器	丸底椀c	R－069	12.6	3.4	(7.2)	○	○	
22	土師器	椀c	R－067	－	4.0＋α	7.1	－	×	
23	土師器	椀c	R－070	－	2.9＋α	8.0	○	×	
24	土師器	椀c	R－077	－	2.9＋α	(6.6)	×	×	

S－3黒灰色砂質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿a（ヘラ）	R－086	8.6	1.3	7.1	○	○	
2	土師器	小皿a（ヘラ）	R－085	8.8	1.4	6.5	○	○	
3	土師器	小皿a（ヘラ）	R－089	8.9	1.5	6.8	○	○	
4	土師器	小皿a（ヘラ）	R－097	8.8	1.3	7.1	○	○	煤付着
5	土師器	小皿a（ヘラ）	R－088	9.0	1.4	7.0	○	○	
6	土師器	小皿a（ヘラ）	R－087	9.4	1.4	7.0	○	○	
7	土師器	小皿a（ヘラ）	R－094	(9.4)	1.3	7.0	○	○	
8	土師器	小皿a（ヘラ）	R－090	9.5	1.1	7.3	○	○	
9	土師器	小皿a（ヘラ）	R－095	9.5	1.5	7.2	○	○	
10	土師器	小皿a（ヘラ）	R－091	9.6	1.4	7.2	○	○	
11	土師器	小皿a（ヘラ）	R－083	9.9	1.2	6.8	○	×	
12	土師器	小皿a（ヘラ）	R－084	9.7	1.3	6.8	○	○	
13	土師器	小皿a（ヘラ）	R－093	9.8	1.4	7.7	○	×	
14	土師器	小皿a（ヘラ）	R－092	9.9	1.4	7.1	○	○	
15	土師器	小皿a（ヘラ）	R－096	(9.9)	1.3	7.2	○	○	
16	土師器	小皿a（ヘラ）	R－080	10.0	1.3	8.3	○	○	
17	土師器	小皿a（ヘラ）	R－079	10.0	1.1	7.3	○	○	
18	土師器	小皿a（ヘラ）	R－081	10.1	1.7	8.4	○	○	
19	土師器	小皿a（ヘラ）	R－082	10.2	1.8	7.2	○	○	
20	土師器	小皿a（ヘラ）	R－098	(11.2)	1.5	8.3	○	○	
21	土師器	小皿c	R－072	(9.9)	2.1	6.0	○	×	
22	土師器	小皿c	R－070	(10.5)	2.0	5.9	○	×	
23	土師器	小皿c	R－069	(10.5)	2.0	5.9	○	×	
24	土師器	小皿c	R－068	10.6	1.7	6.2	○	×	煤付着
25	土師器	小皿c	R－071	(12.8)	2.2	8.0	○	×	
26	土師器	小皿c	R－073	(13.6)	1.8＋α		○	×	
27	土師器	坏a（ヘラ）	R－074	(10.4)	2.1	6.5	○	○	煤付着
28	土師器	坏a（ヘラ）	R－078	10.6	2.0	7.3	○	○	煤付着
29	土師器	坏a（ヘラ）	R－064	10.8	2.1	7.0	○	○	煤付着
30	土師器	坏a（ヘラ）	R－065	11.0	2.4	6.7	○	×	煤付着
31	土師器	坏a（ヘラ）	R－076	(11.5)	2.1	7.9	○	○	
32	土師器	坏a（ヘラ）	R－077	11.4	2.0	8.1	○	○	
33	土師器	坏a（ヘラ）	R－075	11.3	2.0	7.5	○	○	煤付着
34	土師器	坏a（ヘラ）	R－066	(11.8)	2.5	(8.2)	○	×	煤付着
35	土師器	坏a（ヘラ）	R－067	(12.6)	3.8	(9.1)	○	○	煤付着
36	土師器	坏a（ヘラ）	R－063	(14.0)	3.5＋α	(7.5)	○	×	
37	土師器	坏a（イト）	R－055	16.1	2.8	12.0	○	○	煤付着
38	土師器	坏a（イト）	R－056	15.8	2.9	10.0	○	○	
39	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－060	(14.8)	2.8＋α		○	×	
40	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－061	15.2	3.3		×	○	
41	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－059	(15.2)	3.6		○	○	
42	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－057	15.3	4.5		×	○	
43	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－058	16.6	2.7		×	○	
44	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－062	18.2	2.9		×	×	
45	土師器	丸底坏c（ヘラ）	R－044		5.4＋α	(7.6)	－	－	

大宰府条坊跡第234次調査　土師器計測表（3）

A：内底ナデ　B：板状圧痕

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
46	土師器	丸底坏c（ヘラ）	R－042	(15.4)	5.3	7.4	－	×	
47	土師器	丸底坏c	R－050		2.5＋α	7.0	－	○	
48	土師器	椀c（ヘラ）	R－054		2.3＋α	7.4	○	○	
49	土師器	椀c（ヘラ）	R－049		2.3＋α	7.2	－	－	
50	土師器	椀c（ヘラ）	R－048		3.0＋α	7.3	－	○	
51	土師器	椀c（ヘラ）	R－046		3.2＋α	7.2	○	○	
52	土師器	椀c（ヘラ）	R－051		3.5＋α	7.4	－	○	
53	土師器	椀c（ヘラ）	R－054		2.1＋α	7.4	○	○	
54	土師器	椀c（ヘラ）	R－047		3.4＋α	7.1	－	－	
55	土師器	椀c（ヘラ）	R－053		3.3＋α	7.8	○	○	
56	土師器	椀c（ヘラ）	R－052		3.4＋α	8.6	○	○	
57	土師器	椀c（ヘラ）	R－043	(12.4)	4.5	7.4	－	○	
58	土師器	坏×椀（イト）	R－099		1.5＋α	5.4	×	×	薩摩・日向系

S－3黒褐色砂質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿a（ヘラ）	R－009	(10.0)	1.1	7.4	○	○	
2	土師器	小皿a（イト）	R－011	(10.2)	1.1	(8.0)	○	○	
3	土師器	小皿a（ヘラ）	R－012	(10.2)	1.2	(7.2)	○	○	
4	土師器	小皿a（ヘラ）	R－008	10.1	1.7	6.2	○	○	
5	土師器	小皿a（ヘラ）	R－010	(10.6)	1.1	7.8	○	○	
6	土師器	小皿a（ヘラ）	R－013	(10.5)	1.2	(8.4)	○	○	
7	土師器	小皿c	R－007	(12.0)	1.6	(7.2)	○	×	
8	土師器	坏a（ヘラ）	R－014	(11.0)	2.2		○	○	
9	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－015	15.0	3.7		×	○	
10	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－017	(15.4)	3.1＋α		×		
11	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－018	(15.8)	3.4＋α		×		
12	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－016	15.6	3.9		－	○	

S－4黒色粘質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿a（ヘラ）	R－007	(9.0)	1.3	(7.0)	○	○	
2	土師器	小皿a（ヘラ）	R－006	(9.2)	1.3	(7.0)	○	○	
3	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－005	(15.0)	2.8		－	×	
4	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－004	15.0	3.2		×	×	
5	土師器	椀c×丸底坏c	R－003		1.6＋α	6.2	－	×	
6	土師器	丸底坏c（ヘラ）	R－002		3.8＋α	7.3	×	×	

S－4褐灰白色砂質土

No	種別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
1	土師器	小皿a（ヘラ）	R－008	8.9	1.2	7.3	○	○	
2	土師器	小皿a（ヘラ）	R－009	9.0	1.1	6.9	○	○	
3	土師器	小皿a（ヘラ）	R－012	9.0	1.3	6.9	○	○	
4	土師器	小皿a（ヘラ）	R－011	9.4	1.3	7.0	○	○	
5	土師器	小皿a（ヘラ）	R－007	9.5	1.3	7.1	○	○	
6	土師器	小皿a（ヘラ）	R－014	(9.6)	(1.2)	(7.0)	○	○	
7	土師器	小皿a（ヘラ）	R－013	9.6	(1.4)	7.3	○	○	
8	土師器	小皿a（ヘラ）	R－010	9.6	1.5	7.1	○	○	
9	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－006	(14.4)	2.8＋α				
10	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－005	(15.0)	3.0＋α		－		
11	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－004	(16.4)	3.0		－	×	

S－4褐灰白色砂礫

1	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－003	(14.6)	(3.6)		－	×	
2	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－004	(15.3)	3.3		×	×	
3	土師器	丸底坏a（ヘラ）	R－002	(16.0)	3.4＋α		－		

大宰府条坊跡第234次調査　出土遺物一覧表

S－1黒色粘質土

須恵器	坏、甕、壺
土師器	小皿a（ヘラ）、大皿a（糸）、坏a（糸）、鉢
黒色土器B	椀c、片
龍泉窯系青磁	椀：片（1）
白磁	椀：V（1） 壺他：片（2）
中国陶器	他器種：A－2群（2）、B群
瓦類	丸瓦（格子）
その他	桃種子

S－1褐灰白色砂質土

土師器	小皿a（ヘラ）、坏a
黒色土器A	甕
黒色土器B	椀c
白磁	椀：Ⅱ－1（1）、片（1）

S－1明灰色粘質土

須恵器	甕
土師器	小皿a（ヘラ）

S－1茶褐色土

土師器	甕、椀×坏

S－2明灰色粘質土

須恵器	甕、供膳具
土師器	小皿a、坏a（糸）、椀c
瓦器	椀c、鉢
緑釉陶器	椀（近江系）（1）
白磁	片（2）
青白磁	変形合子？（1）
不明施釉陶器	小皿（1）

S－2灰色土

須恵器	坏
土師器	小皿a（糸）、小皿a、坏a（糸）、坏a、椀c、鉢、甕（高台切込み）
瓦器	椀
越州窯系青磁	壺
龍泉窯系青磁	椀：I（1）、I（5）
瓦類	平瓦（格子）、平瓦（布目）
須恵質土器	甕、捏鉢（東播系）
白磁	椀：Ⅱ（1）、Ⅳ－1a（2）、Ⅳ（13）、V－1×Ⅶ－2（2）、V（1）、片（6） 皿：Ⅳ－1（1）、Ⅵ－a（2）、片（1） 壺他：片（2）
青白磁	合子
中国陶器	壺：耳壺I（1）、 甕：片（1） 他器種：盤I－1（1）、耳壺b群（1）、C群（1）

S－2暗青灰色土

須恵器	供膳具、甕、壺
土師器	小皿a、丸坏
黒色土器A	椀
瓦器	片
須恵質土器	捏鉢
青白磁	水注（1）
不明施釉陶器	小皿（1）

S－3黒色砂質土

須恵器	坏c、坏a、坏、高坏、蓋1、蓋3、蓋c、壺（肥後系）、壺、甕、大甕b、横瓶、片
土師器	小皿a（ヘラ）、小皿a2、小皿c、皿、坏a、（糸）、丸坏a、丸坏（穿孔）、椀c、器台、脚、鉢、鉢×壺、甕、甕×鍋
黒色土器A	椀c、片
黒色土器B	椀（畿内）、椀、片
瓦器	小皿a、椀（畿内系）、椀c、椀
越州窯系青磁	椀：I－1a（2）、I－1b（2）、I－b（1）、I（9）、Ⅱ（2） 壺：壺×水注（4）
瓦類	平瓦（格子）、平瓦（縄目）、丸瓦（格子）、丸瓦（縄目）、文字瓦
石製品	石鍋A群、石鍋、権？、砥石、滑石片
土製品	坩堝
須恵質土器	片口捏鉢（東播系）、鉢（篠窯）甕、壺、甕×壺
緑釉陶器	椀（京都系）（2）、椀（近江系）（3）、椀（防長系）（1）、壺×瓶（二彩陶器の可能性あり）（1）、段皿（東海系）（1）
灰釉陶器	椀（3）・皿（2）・壺（1）
白磁	椀：Ⅱ－1（9）、Ⅱ－4（1）、Ⅱ－4×5（1）、Ⅱ（4）、Ⅳ－1（1）、Ⅳ－1a（9）、Ⅳ－2（2）、Ⅳ（51）、V－1b（1）、V－1×Ⅶ－2（8）、V－b（1）、V－1c（1）、V（2） 皿：Ⅱ－1a（1）、V－1（3）、Ⅵ－1a（4）、Ⅵ－a（2）、Ⅵ－1（2）、Ⅵ－1b（2）、片（7） 壺他：I（2）、片（12）
青白磁	耳壺（1）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器（8）
土製品	鉱滓付着、土錘、鞴羽口、羽口×坩堝
その他	長石×石英、桃種子、化石？、焼土塊

S－3黒灰色砂質土

須恵器	坏c、坏、高坏、蓋c3、蓋3、蓋4、蓋c、壺a、壺e（肥後系）、壺b、小壺、甕a、大甕a、横瓶
土師器	小皿a（ヘラ）、小皿a2、小皿a（糸）×坏、坏a、丸坏a（ヘラ）、小皿a2、小皿c、皿c、皿（京都系）、皿、坏a、（糸）、坏c、丸坏a（ヘラ）、坏×椀（薩摩・日向系）、丸坏c、丸碗、椀c、椀、器台×高坏、鉢、盤×鉢脚、壺、足鍋、甕、甕b、小甕
黒色土器A	椀c、椀
黒色土器B	椀c（畿内）、椀、椀（台付）
越州窯系青磁	椀：I－1ウ（1）、I－2aア（1）、I－2ウ（1）、I－b（1）、I（21）、Ⅱ－2a（1）、Ⅱ－2イ（2）、Ⅱ－2（2）、Ⅱ（6）、Ⅲ－1（1）、Ⅲ？（1） 坏：I（2） 大椀：I－2aア（1） 小椀：I－b（1） 壺×水注：Ⅱ類（1）、片（2）
瓦器	椀c
瓦類	平瓦（格子「平井」）、平瓦、丸瓦（格子）、丸瓦片、片
石製品	石鍋、砥石、石鍋転用、平石
須恵質土器	椀、鉢、鉢（篠窯）
緑釉陶器	椀（近江系）（3）
灰釉陶器	椀（1）、耳皿（1）、壺（1）
白磁	椀：Ⅱ－0×1（1）、Ⅱ（4）、Ⅳ－1a（6）、Ⅳ－1b（3）、Ⅳ－2a（1）、Ⅳ（20）、V－1a（1）、V－2a（1）、V－2（1）、XⅡ（1）、XⅢ－2a（2）、片（25） 皿：Ⅱ－1a（2）、Ⅱ－1（1）、Ⅳ－2a（1）、V－1a（2）、V－2（1）、Ⅵ－1a（1）、Ⅵ－a（1）、Ⅵ－1b（1）、片（8） 壺：四耳壺Ⅱ類（1）、片（1）
青白磁	椀（1）
中国陶器	C群（1）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器（2）
土製品	玉、不明土製品、羽口
その他	焼土塊、玉石、鉱滓、平石、黒曜石、馬歯、石英塊

S－3黒褐色砂質土

須恵器	甕
土師器	小皿a（ヘラ）、小皿c、坏a、丸坏a、小丸坏a
黒色土器A	椀c、片
黒色土器B	椀c、椀
越州窯系青磁	椀：Ⅱ－2（1）
瓦類	平瓦（格子「平井」）、平瓦、丸瓦（格子）、丸瓦片、片
石製品	石鍋、砥石、石鍋転用、平石
須恵質土器	椀、鉢、鉢（篠窯）
灰釉陶器	椀（1）、耳皿（1）
白磁	椀：Ⅱ（1）、Ⅳ（1）、V（1）、片（1）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器（1）
木製品	漆皿

S－4黒色粘質土

須恵器	甕、瓶？
土師器	小皿a（ヘラ）、丸坏、丸坏c×椀c、煮炊具
越州窯系青磁	椀：I－2ウ（1）
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦
石製品	砥石
木製品	片

S－4 褐灰白色砂質土

須恵器	坏、甕
土師器	小皿a（ヘラ）、丸坏a、丸坏、甕×鍋
瓦　類	平瓦（格子）、平瓦（縄目）、平瓦、丸瓦（格子）
石製品	石鍋
白　磁	椀：Ⅳ（1）、Ⅴ－1×Ⅶ－2（1）、（未分類輪花あり）（1）、片（1）

S－4 褐灰白色砂礫層

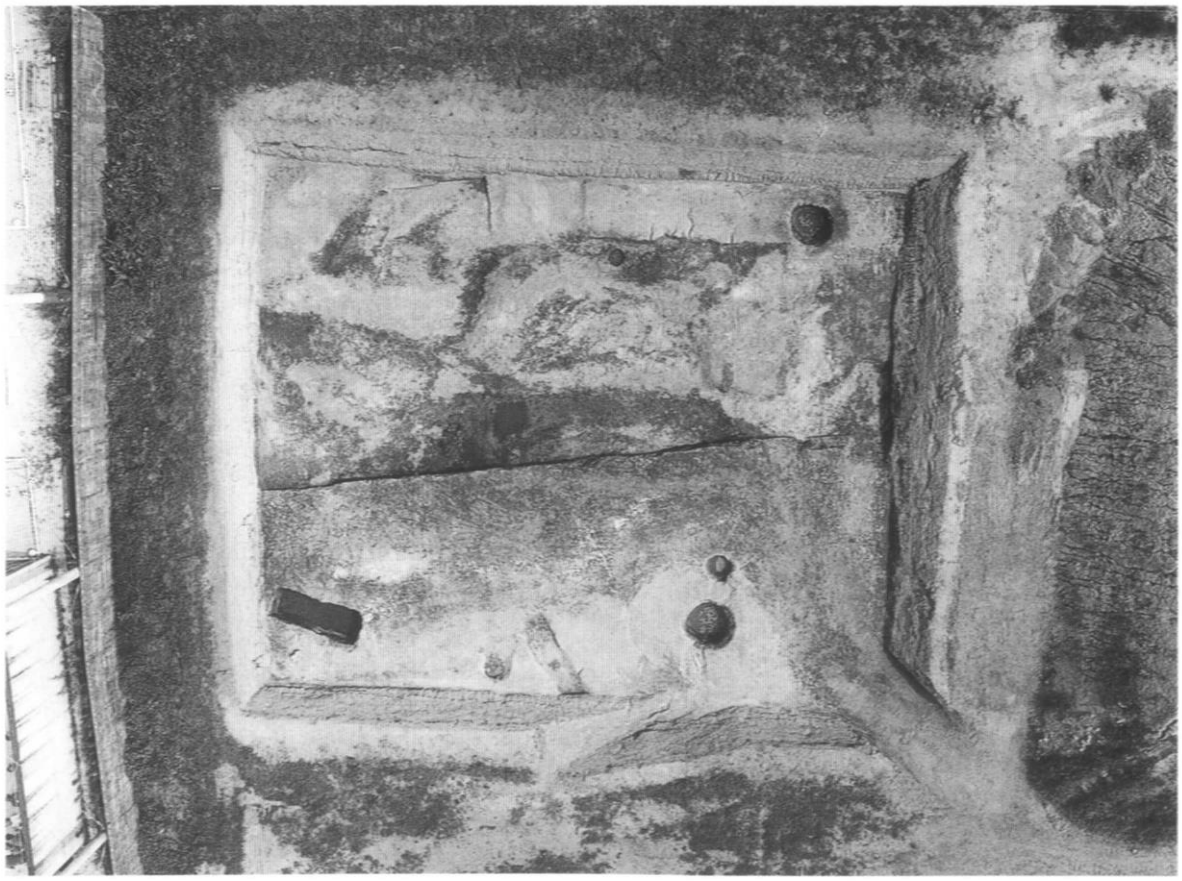
須恵器	坏、甕
土師器	小皿a、丸坏、
越州窯系青磁	片（1）
白　磁	椀：ⅩⅠ－2（1）

表土

須恵器	甕（肥後系？）、蓋、甕、壺、大甕b
土師器	小皿a（ヘラ・糸）、丸坏a（ヘラ）、椀c、高台片、鉢、甕、甕a、鍋
瓦　器	椀c
瓦　類	平瓦（平行叩）、平瓦（縄目）、丸瓦片（格子）、平瓦片
越州窯系青磁	椀Ⅰ－2ウ×Ⅰ－5（1）、Ⅰ（1）、Ⅱ（1）
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ－2（1）、Ⅰ（1）、Ⅱ－b（3） 他器種：坏Ⅲ－3b（1）
同安窯青磁	椀：片（1）
白　磁	椀：Ⅳ（17）、片（2） 皿：Ⅵ（1）、Ⅶ（1）、片（6） 他器種：片（7）
石製品	石鍋、砥石、滑石加工品
木製品	片
瓦質土器	風炉？、鉢
緑釉陶器	椀（近江系）（3）、産地不明（1）
国産陶器	肥前系
国産磁器	肥前系
白　磁	椀：Ⅳ（17）、片（2）皿：Ⅵ（1）、Ⅶ（1）、片（6）
須恵器(輸入)	朝鮮系無釉陶器（2）

図　　版

大宰府条坊跡第234次調査区全景（北東上空から）



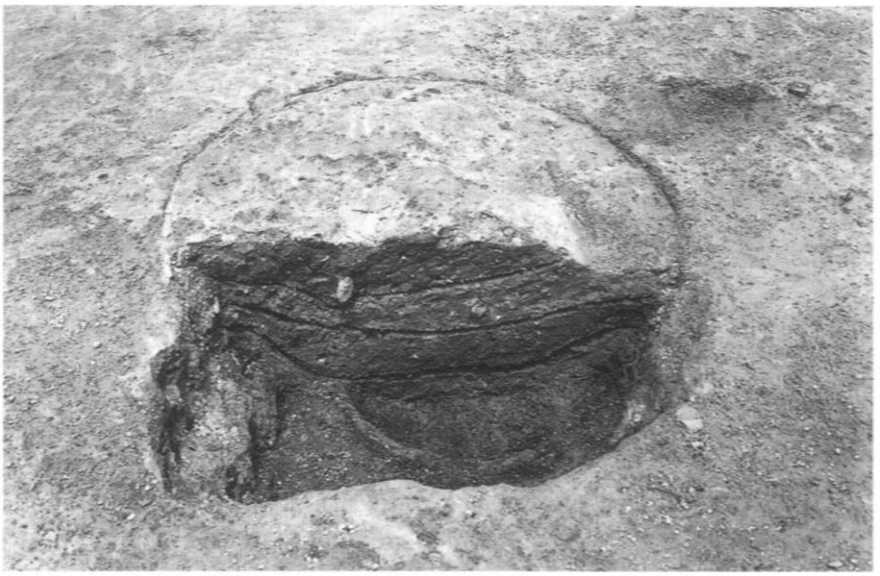
大宰府条坊跡第234次調査区全景（上が北）

図　版　2

234SE004礫検出状況（北から）

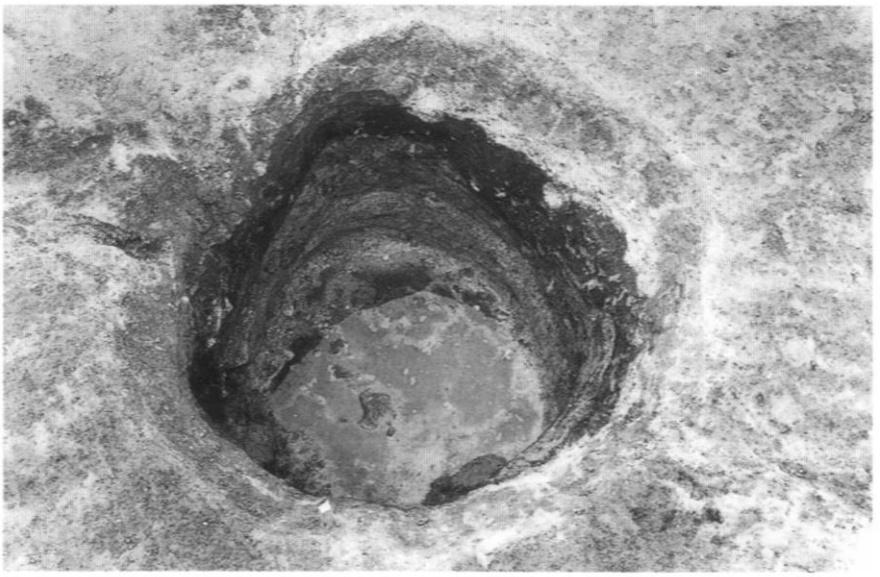
234SE004井戸枠検出状況（東から）

234SE004堀り方（南から）



234SK001土層断面（南東から）

234SK001全景（南東から）



234SK002全景（東から）

図　版　4

調査区北壁（234SX003）土層断面（南西から）

調査区東壁（234SX003）土層断面（南西から）

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと 29
書名	大宰府条坊跡 29
副書名	第234次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第83集
編著者	小山裕之・井上信正
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所
所在地	太宰府市教育委員会　〒818-0198　福岡県太宰府市観世音寺1-1-1　TEL092-921-2121 玉川文化財研究所　〒221-0822　神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9　TEL045-321-5565
発行年月日	平成17（2005）年5月10日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
大宰府条坊跡 第234次	左郭8・9条 5坊	太宰府市 朱雀4丁目 2628－2	402214	210044 －234	+56210.000	－44340.000	20040604	20040805	300.0	集合住宅建設

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡 第234次	都城跡	古代～中世	流路・井戸・土坑	土師器・須恵質土器・舶載陶磁器	

太宰府市の文化財第83集

大宰府条坊跡 29

－第234次調査－

平成17（2005）年5月

発行　太宰府市教育委員会
〒818-0198 太宰府市観世音寺1－1－1

編集協力　玉川文化財研究所
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1－8－9

印刷　株式会社アルファ
〒250-0001 神奈川県小田原市扇町5－25－23